



理財論續篇

自第一章  
至第十八章

上



4.4  
A1450  
1



理財論續篇

第一章

理財ノ事ニ関セル書籍

凡ソ理財ノ事ニ関スル書其数甚タ多シト雖モ其論スル所ハ大抵謬見妄想ニ過キス然ラレハ唯大蔵ノ入額ヲ増殖セシムルヲノミニ汲々トシテ大蔵ノ要求或ハ給與ヨリ生スル所ノ弊害ヲ毫モ顧慮セサル會計上ノ意見ニ外ナラス莫ニ経済家ノ理財ノ事ヲ論究セル書ハ甚ク稀レナリ故ニ予輩ハ理財ノ事ヲ謂フテ曰ク理財ノ事ハ尚ホ論究ス可キ原理及ヒ明瞭ナラシム可キ事情ノ多クアル経済學中ノ一科ナリト  
理財ノ事ヲ論究セシ高名ナル経済家ノ中ニテ第一等ニ列序スルモノハ「スミス」及ヒ「カール」ノ三氏ナリ其他「ボバ」  
「バニ」  
「ボマギ」  
「イウベル」  
「ラ」  
「ブ」  
「レト」  
「及ヒ」  
「ム」  
「ロン」  
如キ経済家

大正十一年四月

ノ理財ノ事ヲ論究スル者アリト云氏其論スル所ハ皆千六百年  
ノ末或ハ十七百年代ノ始メニ於ケル實事ト理論トニ係ルヲ  
以テ此經濟學ノ後ニ發生シタル經濟學上ノ諸論ト自ラ背馳ス  
ル所ナリ能ハサルナリ

夫ノ「スミット」氏ハ「デモレウベニ」ニテ「マシュー」ウベレーン、ウド、エ、レブ、ニ  
リ「ク」ト題セル書ノ四分ノ一ヲ理財ノ事ニ供シタリ而シテ其中  
ニ論スル所ハ第一國家ノ守護、裁判、公業、貿易ヲ盛大ナラシムル  
為メノ官署、教育、國主ノ地位ニ要スル諸費第一社會及ニ國主ノ  
歳入、土地賣買税、店錢税、資本ノ利益税、或ル官吏ニ賦課スル地  
税、家屋税、動産税、債銀税、歳入税、支消税、第三公債即チ是ナリ  
「シ、ベ、セ」氏モ亦「スミット」氏ト同シク其書ノ四分ノ一ヲ以テ一般  
ノ支消ノ原因ト結果トヲ論究セリ但シ租税ノ事ニ於テハ「スミ  
ット」氏ノ如ク其各種ニ就キテ講究スルコトナク唯其賦課法ヲ公平

ナラシメ其設立法ヲ善長ナラシムルノ論題ヨリ生スル所  
ノ考説ノミヲ閑陳セリ

「リカルド」氏モ亦「デ、プレ、ン、シ、レ、フ、ド、レ、コ、ノ、ミ、ー、ホ、リ、ナ、ツ、ク、エ、ド、レ、  
ニ、ホ、ー、ト」題セル書ノ殆ント四分ノ一ヲ理財ノ事ニ供シタリ而  
シテ其中ニ論スル所ハ租税ノ總質、地稅、土地ヨリ生スル所ノ元  
ノ、十分一稅、金稅、家屋稅、所得稅、債銀稅、農業ニ関セサル物產ノ  
稅、物產者稅、即チ是ナリ其他同氏ハ小本ヲ以テ其第一卷ニ於テ  
主トシテ諸公債ヲ確立債ト爲シ而シテ漸次之ヲ償却スルノ方  
法ヲ論シ第二卷第三卷ニ於テ銀行証券ノ下落ヲ講シ第四卷ニ  
於テ國庫銀行ノ計畫ヲ閑陳シタリ

右ノ有名ナル「スミット」氏「シ、ベ、セ」及ビ「リカルド」ノ三氏ノ後ニハ直  
ニ「フ、ロ、レ、ー、エ、ス、ク、ラ、ダ、ー」氏ヲ列序スルヲ得ヘシ同氏ハ「ト、レ  
テ、ー、テ、ヨ、ノ、ミ、ー、ホ、リ、ナ、ツ、ク、エ、ド、レ、ク、レ、ク、ナ、ツ、ク」ト題スル書中ニ理財ノ

論ニ於テ新タニ一説ヲ開キレ入ナリ然レ氏此書中理財ノ事ヲ  
論スル所ハ僅カニ集六分ノ一ニ過キズ而シテ其中ニ論スル所  
ハ地稅土地ノリ生スル所ノモノ、十分一稅、資本ノ利益稅、賃銀  
稅、歳入稅、直稅、間稅、西班牙ニ設立スベキ新稅、公債是レナリ、同氏  
ハ公債ノ著シキ弊害ヲ表出シタリ前篇第十七篇第二章ヲ參看  
ス可シ

ゴーク、キユロク氏ハ其「アレンシレゴ」デコノミ、ボリチックト  
題セル書ニ於テハ理財ノ事ヲ論究セザリシト虽モ他ノ一書ニ  
於テ充分ニ之ヲ論悉シタリ又「ロー」氏モ同シク一書ヲ以テ此經  
濟學ノ緊要ナル一科ヲ講究シタリ

其他「マルチユース」カルベーク「セニラール」ロマセル等ノ如キ著述  
家ハ全ク理財ノ事ヲ論究セス又「シスモン」ロシ「トルク  
等ノ如キ著述家ハ理財ノ事ヲ論述スルモ僅カニ數語ニ過キズ

又「ニユアル」ミール氏ハ「乾道經濟學」ノ諸論ヲ包括シタル「リ  
「レーブル」オフ「ボリ」ナカ「ル」エ「コノ」ミト題スル書ヲ世ニ公布  
セシガ其書中理財ニ關スル事ハ唯其原論ノミヲ少シク論述シ  
タリ

現今公法論者及ヒ經濟家ノ中ニテ理財ノ事ニ関セル書ヲ著ハ  
セシモノ少シトセズ今其人各ヲ舉クレバ即チ「ボア」ス「ラ」ン  
「ド」リ「ジョ」フ「レー」シ「タル」デン「ヒュー」ノ「ド」  
「ハリ」ヨ「シ」エ  
「ハ」ス「トル」フル「ド」ン等ノ如キ諸氏是レナリ

予輩カ既ニ列序シ來リタル所ノ著述家ノ外ニ尚<sub>キ</sub>理財ノ事ヲ論  
究セシ著述家甚タ多シ而シテ其理財學上ニ有益ノ論説ヲ來タ  
スモノモ亦少シトセズ然レ氏經濟上ニ充分ナル學識アリテ此  
事ヲ論究セル者實ニ稀レナリ故ニ理財上ニ於テ未タ明解ス可  
クナル難題ヲ明解スルヲ助クル者モ亦甚タ稀レナリ抑理財

ノ事ヲ論究スル所ノ書ハ予輩カ上ニ陶陳スルカ如ク大抵一ハ  
唯行政或ハ會計上ノ便ノミニ着目シテ論述セルモノナリ又一  
ハ確信スルニ足ラサルモノナリ蓋シ經濟上ニ充分ナル學識ナ  
キ者ノ著述ニ係ルヲ以テナリ

予輩ノ此理財論ヲ熟讀スルノ後予「バロ」氏ノ經濟學書中ニ論  
載スル所ノ租稅論并ニ「アダムスミツ」氏ノ租稅ト公費トニ就テ  
論スル所ノモノ及ヒ予輩カ下條ニ揭示スル諸書ヲ一讀セハ蓋  
シ大ニ得ル所アル可シ

理財ノ事ヲ餘ク研究スルヲ得可キ書ノ中ニテ予輩ハ先ツ左ノ  
書ヲ以テ宸好トナス

諸書

「子エル」氏ノ「ロ」プロフリーエテ」ト題スル小冊子（此書、千八  
百四十八年ノ刊行ニシテ此篇中ニ於テ同氏ハ教種稅ノ租稅

八  
五

下ヲ稱讚セリ

「ギヌスターブ」氏ノ「ト」ト、エ、モ子、テ、ク、レ、ジ、ト、エ、レ、ニ、ホ  
トト題スル書（此書ハ千八百五十三年巴理ニ於テ刊行スルモ  
ノニシテ同氏ハ開稅ト歲入稅トヲ排撃シ而シテ簡約稅及ヒ  
資本稅ヲ稱讚シテ公債ヲ甚ク忌憚セリ）

「エミールド」氏ノ「バ」バ、レ、テ、ニ、ト題シ後予第六刊行ノ時ニ至  
ハ「ル」ソ、レ、ア、リ、ス、ハ、エ、レ、ン、ポ、トト題シ後予第六刊行ノ時ニ至  
リテ「レ」ニ「ボ」ト改ム其巴里ニ於テ刊行スルハ千八百五十二  
年ニ係レリ此書ハ千八百五十八年同氏ノ著シタル「ケ」ス、チ、オ  
ニ、レ、シ、ン、タ、ニ、トト題スル書ノ第十一冊ヲ編成セルモノナリ同  
氏ハ右ノ租稅論ヲ分ツテ二卷ト爲シ其第一卷ハ古今ニ成三  
セル不正ノ諸稅ヲ論述シ第二卷ハ單一稅ノ事ヲ論究シテ大  
ニ之ヲ稱讚シタリ

日耳曼ニ於テハ「ヘンデルベルグ」大學校ノ經濟學教師「ロ」氏  
ノ經濟論同氏、其第三卷ニ於テ都テ理財ノ事ヲ論述シタリ  
其第一刊行ハ千八百二十六年第五刊行ハ千八百五十一年ニ  
アリ此書ハ未タ之ヲ佛語ニ反譯セシモノアラズ  
英國ニ於テハ「レル、マ」ク、キョロク氏ノ「エ、トレ」チーニス、オニ  
ゼ、プリニレーブル、エシド、ブ、クナカール、インフルニス、オ  
フ、タクゼーシヨニエシド、ゼ、フォン、テイ、ング、レス、テムト云フ理財  
ノ事ヲ論究セル書此書ハ千八百十五年倫敦ノ刊本ナリ是亦  
佛語ニ反譯セシ者未タ之レアラズ  
西班牙ニ於テハ「ル、イ、マリア、バ、ストル」氏ノ「ラ、シ、ア、ン、シ、ア、ド、  
、ラ、コントリビユレヨニ」ト云フ書此書モ亦佛語ニ反譯セシモノ  
未タ之レアラズ同氏ハ此書中ニ租税ノ事ヲ評論シ自、命、說、  
ヲ、開、列、シ、具、信、憑、ノ、事、ヲ、論、究、セ、リ、又、同、氏、ハ、「ラ、フ、イ、ロ、ン、フ、イ、ア、テ、ル、

ハ  
ハ

「クレジト」ト題スレ書ニ於テモ亦此信憑ノ事ヲ大ニ論シ  
タリ  
エスキール、ド、バリエウ氏ノ「イストアール、テ、セ、ン、ポ、ー、ゼ、子、ロ、ー、  
シユル、ラ、プロ、フリ、エ、テ、ー、エ、ル、ル、ウ、ベ、ニ」ト題スル書同氏ハ其中  
ニ博ク古來ノ事跡ヲ掲載シ併セラ之ヲ評論セリ此書ハ千八  
百五十七年巴黎刊行ノモノナリ同氏ハ又「エ、ユ、エ、ド、レ、ル、レ、  
ゼ、ン、ポ、ー、ゼ、ン、レ、ク、コ、ン、レ、テ、レ、ー、ス、ー、ル、ラ、ッ、ポ、ル、イ、ス、ト、リ、ク、  
、エ、コ、ノ、ミ、ツ、ク、エ、ホ、リ、チ、ク、ブ、レ、セ、テ、ー、ト、コ、ニ、レ、テ、ラ、シ、ヨ、ニ、  
ゼ、子、ラ、ー、ル、レ、ユ、ル、レ、ン、ポ、ー」ト題スル書ヲ編輯セリ此書ハ前者  
ニ論ル所ヲ充分ナラレムルモノナリ蓋シ此書ニ論載セ  
モノ、中ニ千八百五十七年ヨリ現今ニ至ル間ノ經濟新説  
ニ登録スル所ノモノ甚シトセズ予輩モ亦此理財論中ニ屢ニ  
ヲ引用シタリ但シ右ノ書ハ現今尚印刷中ナリ

カール・ド・シエスノ祖稅論〔此書ハ昨年即チ千八百六十一年ヨリ  
巴理ニ於テ發表シタリ同氏ハ瑞士「ウバウ」<sup>ウバウ</sup>ノ點取文會ニ於  
テ第一等ノ賞典ヲ受ケタル人ナリ此點取文會ノ事ハ續篇ノ  
第六章ヲ見ル可シ〕

「アイエー」女氏ノ「テオリード・レニホー・ウ・ラ・レーム・ソレアー  
ルト」題スル書〔此書ハ目今尚印刷中ナリ此婦人モ亦瑞士「ウバ  
ウ」<sup>ウバウ</sup>ノ點取文會ニテ賞典ヲ受ケタル者ノ一人ナリ〕

佛國理財ノ事ニ関セル書

「ポアスラン・ド・リール」氏ノ「テゼニポ・エ・テ・シヤル・レニ・テ・プ・プ・ル、  
アン・フランシスト」題スル書〔此書ハ千八百二十四年巴理刊本ナ  
リ但シ世人ノ此書ヲ知ル者甚タ稀シナリ同氏ハ佛國第一立  
憲議院ノ議員ナリ〕

「ブルキ」<sup>ブルキ</sup>「ド・ジフレ」氏ノ「システーム・フィナンシエール

「フランク」ト題スル書〔此書ハ同氏ノ曾テ大蔵ノ高官タ  
リ時ニ會議院ニ出セル達言書等種々ノ書類ヲ蒐集セシメテ

「ポーク」氏〔澳地利ノ關稅委員長〕ノ「アドミニストラレヨニ・フィナン  
シエール」ト題スル書〔此書ハ近來佛人「レ・ジャン  
チール」氏之ヲ佛語ニ互譯シタリ〕

理財上ノ來歴ニ関スル書

上ニ掲載セル所ノ書ト虽モ亦多少理財上ノ來由ヲ示説スル  
モノ無キニアラス

大蔵ノ總檢査官タル「ベリール」氏ノ著ハセル「イストアール」  
イナシエール「ド・ラ・フランシスト」題スル書〔此書ハ獨裁政治起派  
ノ時代ヨリ千七百八十六年ノ末ニ至ル間ノ理財ノ景況ヲ詳  
説シ加フルニ其祖稅及テ歳入歳出ノ核算表ヲ掲載セルモノ

ニレテ實ニ好書ト謂フ可シ此書ハ千八百三十年刊行ニレテ  
一部二冊ノモノナリ

同氏ハ又千八百三十七年「エクスホゼー、ド、ラトミニストラ  
レヨシ、ゼ子ラール、デ、フィナンス、デ、ユロアイウム、ユニー、エトセテ  
ラト題スル書ヲ著ハレテ諸侯ノ管轄地、諸會社、僧徒等ニ関  
セル理財ノ事ヲ詳論セリ

「ホルブロー、ベブレール」氏「西班牙ノ經濟家ニシテ國事犯、爲  
メニ追放サレタル人ナリ」ノ「イストアール、フィナンス、レ、エール、  
エ、スタニスチック、ド、ラニポール、プリタニック」ト題スル書  
「此書ハ千八百三十四年」ペ、エム、ジャコビー」氏之レヲ英語ニ  
反譯シタリ

「ルーセロー、ド、ユルゼール」氏ノ「コティクシヨ子ール、デ、フィナ  
ンス、ド、ラニシクロベレ、メトジック」ト題スル書「此書ハ千

「租税及ロ古代ノ理財法ヲ採明セル者ニレテ其刊行ハ千七  
八十四年ニアリ

千八百五十九年政治學校ノ理財科ニ於テ千七百八十九年前  
後ノ租税ヲ論題ト爲シタル點取文ヲ蒐集セシヲ以テ理財上  
ニ関スル有益ノ書ヲ世ニ公布スルヤ必ス迄キニ有ル可シ

理財ノ事ニ関セル年報書

佛國理財ノ事ニ就テハ千八百十七年以來大歲年報書中ニ此  
事ヲ論述スル所少シトセス又「ブローク」氏ノ「ラ、スタニスチック  
ド、ラ、フランス」ト題スル書中ニモ亦之レアリ

「ラニニール、ド、レコノミ、ポリチク、エ、ド、ラ、スタニスチック」  
ト題スル年報書中ニ諸國ノ歲入歲出ニ関セル事情ヲ採明セリ  
但シ其之ヲ採明トルヤ同ク諸國理財ノ景況ヲ表示セル「アル  
マナク、ド、コ」ト各クル年報書ニ比スレハ或ハ一層詳細ナ



ル所アル可シ

英國理財ノ事ニ就テハ「ゴニハニオニ、トウゼー、アルマナク」ト各  
ツクル書中ニハ此事ニ関セル會議院ノ論説ヲ畧述セリ又「合  
衆國理財ノ事ニ就テハ「アメリカン・アルマナク」ト題セル書中  
ニ之ヲ論述セリ此書ハ一小冊ニシテ毎年刊行セルモノナリ  
「靴迫、ロンドン、ドクゾエルニ」氏「澳國統計局長」ハ澳國ノ統計書  
第一年分ヲ世ニ公布シタリ此書ハ曾テ世人ノ銘ク聞知セザ  
ル所ノ理財ノ景況ヲ明示シ加フルニ千七百年代ノ事ヲモ標  
出セル者ナリ

「ホルム」氏ハ千八百五十九年以來毎年「アニユレール、エニテル」十  
レヨナリナル「デュクレジ、プブ、リク」ト云フ表題ヲ以テ理財ノ  
事ヲ論究スル書ヲ刊行セリ此書ハ特ニ國家ノ理財「理財法、公  
債、祖稅、銀行及ヒ鐵道等」ノ論説ヲ掲載スルモノナリ

八九

其他理財ノ事ヲ論述セル書ヲ知ラント欲セバ「予輩」ノ編輯セ  
レ「經濟學書系」ニ千八百五十二年以來ノ「經濟年報書」ニ登錄セ  
ル書ヲ見ル可シ又「予輩」ノ此理財論中ニ引用スル所ノ諸書及  
ヒ「瑞士」ガ「バウ」ガ「參議院」ニテ「聚集」セシ「點取」文中「黨典」ヲ得タ  
ル文章ヲ參省ス可シ

簿記法ヲ論述スル書

「ホーク」氏ノ著シタル書「上ニ掲書」中ニ簿記法ヲ論スル所ア  
リ「オー」ジ「ワレ」氏ノ著シタル書「第五卷」中ニ「簿記法」ヲ  
説ク所アリ又「モン」ト「クル」氏ノ著セル「ド」ラ「コン」タ「ビ」リ「テ」  
「フ」リ「ク」タ「アン」フ「ラ」ニ「スト」云フ書ニ於テハ都テ此事ヲ論述セ  
リ但シ此書ノ事ニ就キ千八百五十四年十月「經濟新誌」ニ登錄  
シタル「英國大蔵部」ノ一論文ヲ見ル可シ

第二章

租税ノ賦課法ニ就キ「タムス・ミツツ」及「シベセー」二氏  
設立セル原則（前篇第十三篇第一章ヲ見ル可シ）

「アダムス・ミツツ」氏ノ設立セル原則

第一則 國民ハ各其家産ニ應レテ政府ノ經費ヲ支給セザル可  
ラズ今之ヲ重言スレバ各政府ノ保護ニ因リテ得ル所ノ其歳  
入額ニ應レテ之ヲ支給セザル可ラズ  
此ノ國民ハ各其政府ノ經費ヲ支給スルニハ恰モ一大財産ノ共  
有者カ各此財産ヨリ得タル所ノ利益ノ價格ニ應レテ其費用ヲ  
支給スルカ如クナラザル可ラズ抑租税ノ賦課法ニ於テ公平不  
公平ト名ケルモノヲ來タス所以ハ即チ此原則ヲ遵守スルトセ  
ザルトニ在リ此附言モ亦「アダムス・ミツツ」氏ノ  
言ナリ以下皆同シ

總テ歳入ノ三種（土地ノ收獲利益、債銀）ノ一ノミニ課スル所ノ租  
税他ノ二種ニ觸レザルヲ以テ乃チ不公平ノモノ也ト云フ

ニ注意セザル可ラズ

第二則 各自ノ納ムヘキ租税ハ鉅ク之ヲ確定シ而シテ擅ニ變  
更ス可ラザル者ト為スヲ要ス詳カニ之ヲ言ハ、納税ノ期節

納税ノ方法及ヒ税額ヲシテ確實明瞭ナラシメザル可ラズ  
若シ其確實明瞭ナラザル時ハ税吏ハ各納税者ニ對シテ恣ニ税

額ヲ増加シ或ハ賄賂ノ為メニ之ヲ減少スルニ至ル可シ  
租税ノ事ニ於テ確實明瞭ナラザル時ハ常ニ自ラ人民ノ

忌嫌スル所ノ税吏ハ縱令其品行端正ノ者ト雖モ尚モ妄行醜態ヲ  
為スニ至ル可シ

各納税者ノ納ム可キ税額ノ確實ナルコトハ租税ノ一ニ於テ一大  
難事ナル者ナリ曾テ之ヲ諸國ニ徵スルニ蓋シテ税額ノ些少ナル

不實ノ弊害ハ賦税法ノ著大ニ不公平ノ弊害ヨリモ尚モ一層甚  
シキ者ト考ヘ認スルヲ以テナリ

第三則 租稅ヲ徵收スルニハ納稅者ノ為メニ最モ便宜也  
ト省做ス所ノ期節ト方法ヲ以テセサル可ラス  
借地料或ハ家錢ニ賦課スル租稅ハ通常地主或ハ家主ノ此借地  
料又ハ家錢ヲ收入スル時ト同時ニ之ヲ徵收スルヲ以テ此稅ハ  
實ニ納稅者ノ為メニ最モ便宜ナリト省做ス所ノ時機ニ於テ徵  
收セル者ト云フ可レ之ヲ宣言スレバ此稅ハ納稅者ノ納ム可キ  
モノヲ所有セル時ト思惟スル所ノ時機ニ於テ徵收セルモノト  
謂フ可レ又奢侈ニ屬スル支消品ニ課スル所ノ租稅ハ畢竟其支  
消者ノ支給スルニ至ル可キ者ニシテ彼等ハ此支消品ヲ購求ス  
ル毎トニ少シク之ヲ支給シ以テ自己ノ便宜ナル時之ヲ支給ス  
ルモノ也實ニ彼等ハ此支消品ヲ購求スルト否ラサルトハ我カ  
意ノ如クナレバ若レ此稅ノ為メニ大ニ損害ヲ蒙ルアレバ即  
チ可己ノ過行ト言ハサル可ラス(必需品ニ至リテハ夫ノ奢侈ニ

八一七

屬ル支消品ニ反レテ我カ意ノ如ク之ヲ購求セサルヲ禁ハサ  
ル者ナリ)

第四則 總テ租稅ヲ徵收スルニハ大藏ニ收納スル金額ノ外ニ  
ハ可及的僅少ナル金額ヲ納稅者ノ手ヨリ出サシムルノ方法  
ヲ以テセサル可ラス納稅者ノ手ヨリ出テ大藏ニ入ラサル者  
即チ收稅費トナルモノヲ云フ  
又稅金ノ大藏ニ入ル時ト納稅者ノ手ヨリ出ル時トノ間ヲレ  
テ可及的遠サカラサルノ方法ヲ以テセサル可ラス  
租稅ヲ徵收スルニ左ノ四箇ノ事由ニテ大藏ノ要求スルヨリモ  
多量ノ金額ヲ納稅者ノ手ヨリ出サシムルアリ或ハ大藏ニ稅  
金ヲ要スル時期ヨリモ遠ク其以前ニ納稅者ノ手ヨリ出サシム  
ルアリ

第一 租稅ヲ徵收スルニ多ク稅吏ヲ用ルヲ要スルアリ  
然ラハ其ノ其俸給ハ稅金ノ過半ヲ減少シ加之此ノ稅吏ノ惡

行<sup>ル</sup>計<sup>ヲ</sup>テ<sup>ハ</sup>税<sup>金</sup>私<sup>ス</sup>ハ人民ノ為メニハ恰元政府ノ更ニ一

陪<sup>ル</sup>税<sup>ヲ</sup>設<sup>ス</sup>立<sup>ス</sup>ル時ト同シ影響ヲ來<sup>ス</sup>可<sup>シ</sup>

二 租税ハ人民ノ諸業ヲ妨害シ而シテ人民ヲシテ大ニ世

人ニ生計ノ道ヲ閉ク可キ其ノ營業ニ從事スルヲ止メレハ

ルヲアリ是ニ由テ之ヲ觀レハ租税ハ一方ニ於テハ人民ヲシ

テ強テ出費ヲ為サレメ一方ニ於テハ人民ヲシテ此出費ヲ為

スヲ得可キ情状ニ至ラレハ可キ本源ヲ減少スル者也

三 租税ヲ免レン<sup>ト</sup>ヲ謀リテ事已ニ發覺シ而シテ其犯罪

者カ命セラレ、所ノ沒收或ハ罰金等ニ就テ考フル時ハ租税

ハ彼等ノ産ヲ破リ且之ガ為メニ曾テ彼等カ其財亦ヲ利用ス

ルヨリ社會ニ生セシメレ所ノ利益ヲ全ク減却スルヲアリ

凡<sup>ク</sup>無<sup>キ</sup>罪<sup>ニ</sup>一<sup>ノ</sup>税<sup>ヲ</sup>設<sup>立</sup>スレバ密<sup>賣</sup>等ノ如キ惡業ヲ大ニ醸<sup>成</sup>

スルニエ<sup>ル</sup>者ナリ抑<sup>テ</sup>斯<sup>ノ</sup>如<sup>キ</sup>惡業ノ罰<sup>則</sup>ハ此惡業ノ增加ス

此ニ臨テ亦愈<sup>々</sup>多<sup>ク</sup>ナラザル可<sup>ラ</sup>ズ是ハ蓋シ政府ノ素ヨリ正

理ヲ犯<sup>ス</sup>者ニシテ親<sup>ラ</sup>此惡業ノ道ヲ開キ而シテ之ヲ謀ル者

ヲ懲<sup>罰</sup>スル者ト古<sup>ク</sup>可<sup>シ</sup>加之其<sup>ノ</sup>罰<sup>ス</sup>ルヤ常ニ其刑ヲ寬

ニス可<sup>キ</sup>時機即<sup>チ</sup>其盛ニナル時機ニ於テハ反テ愈<sup>々</sup>之ヲ嚴<sup>酷</sup>

ナラシメタ<sup>リ</sup>

四 租税ハ人民ヲシテ屢<sup>々</sup>税吏ノ巡察及<sup>チ</sup>其忌<sup>惡</sup>ス可<sup>キ</sup>搜

索<sup>ヲ</sup>甘<sup>受</sup>セシムルヲアリ然<sup>ラ</sup>バ則<sup>チ</sup>人民ハ之ガ為メニ生<sup>ス</sup>

ル所ノ徒勞<sup>困</sup>却<sup>テ</sup>税吏ノ暴<sup>壓</sup>ヲ忍<sup>ハ</sup>サル可<sup>ラ</sup>ズ縱<sup>令</sup>此徒勞<sup>困</sup>

却<sup>ハ</sup>出<sup>費</sup>ニア<sup>ラ</sup>ズト<sup>モ</sup>虽<sup>モ</sup>死<sup>若</sup>シ之ヲ免<sup>カ</sup>ル、<sup>ト</sup>アレバ幾<sup>許</sup>カ

ノ金額<sup>ヲ</sup>出<sup>ス</sup>モ可<sup>也</sup>ト<sup>モ</sup>思<sup>惟</sup>スル人アルヤ必<sup>セ</sup>リ是ニ由<sup>テ</sup>三

ヲ觀<sup>レ</sup>ハ此徒勞<sup>困</sup>却<sup>ハ</sup>亦幾<sup>許</sup>カノ出<sup>費</sup>ニ比<sup>均</sup>スルモノタル

ヤ明<sup>カ</sup>ナリ

租税ノ因<sup>テ</sup>主<sup>ク</sup>利<sup>ス</sup>ル比例ヨリ屢<sup>々</sup>大ニ人民ヲ害<sup>ス</sup>ルニ至<sup>ル</sup>

ル

「ア」ル所以ハ皆右ニ陳述セル四事ノ一二根基ナル者也

「ジ」ベセル氏ノ設為ル原則

「祖」税ノ最良ナルモノ即チ其弊害ノ最少ナル者左ノ如シ

「第」一 各人ノ納ム可キ税額ノ輕少ナルモノ

「第」二 納税者ヨリ出テ、大藏ニ入ラザル者收税費ヲ最モ少

ナク要スルモノ

「第」三 賦課法ノ最モ公平ナルモノ

「第」四 生財事業ニ害ヲ与フル「第」一「第」二「第」三ノ少ナキモノ

「第」五 品行ヲ害スル無ク及テ之ヲ善クスルモノ之ヲ重言ス

レハ社會ニ益アル風俗ニ便宜ナルモノ

### 第三章

祖税ヲ以テ品行ヲ善クスル器械ト做ス事

八 十三

此事ニ就テハ前篇第十一篇第六章ニ於テ奢侈品税ニ就キテ論究セシモノヲ見又次ノ第五篇ニ掲載スル者ヲ見ル可シ

### 第四章

祖税ヲ以テ諸放銀中ニテ最良ナルモノト做ス事前篇

第四篇第三章及ヒ第九篇第二章ヲ見ル可シ

祖税ヲ以テ諸放銀中ニテ最良ノモノト做スノ謬説ハ既ニ十七  
百年代ニ於テ大ニ流布スル所ナリ嚮キニ「ル」セロ「ト」レニ  
「ジ」氏ハ其「シ」クシヨ子「ル」テ「フ」イ「ン」ス「ト」ウ「ン」シ「ク」ロ「ベ」レ「  
メ」ト「ジ」ク「ト」題スル書中ニ此謬説ニ答ヘテ左ノ如ク言ヘリ

或予ニ言フテ曰ク祖税ハ諸放銀中ニテ最良ノモノナル可シ  
ト然レ而予以テ之ヲ見ル時ハ若シ最良ノ政府即チ唯一人  
一家ニ均方ニ利益ヲ与フル「第」一「第」二「第」三「第」四「第」五ノ利益

ヲ与ラレカ如キ政府アラハ昂此レニ納ル祖税ハ實ニ諸  
放銀中ニテ最良ノモノナリ可シ

蓋レ同氏ハ斯ノ如ク言フト虽モ最良ノ政府ニ於ルモ或ハ同  
氏ノ言ノ如クナルヲアリ或ハ其言ノ如クナラザルヲアリ若シ  
其最良ノ政府トハ可及的民事ニ関涉セスレテ實モ真正ナル處  
置ト能ク經濟ノ道ニ合フタル方策トヲ以テ唯安寧ヲ保護スル  
モノニアリト為セハ則チ同氏ノ言ノ如ク然リ何トナレハ斯ノ  
如キ政府ニ於テハ税額ハ輕少ニシテ其賦課法ハ公平ナルヲ以  
テナリ是ニ於テカ人民各祖税トシテ其歳入ノ一部分ヲ供スル  
ハ最チ最良ノ放銀ヲ為ストハ言フ可ラザルモ其最良ノ用法ヲ  
為スト言フヲ得可シ

然リ、虽モ同氏ノ説ク所ノ如キ政府ヲ以テ最良ノ政府ト為ス  
ニ於テ、同氏ノ言ノ如クナラザル也實ニ唯一人一家一地方ニ  
利益ヲ興ヘスレテ燃テ全國一般平均ニ利益ヲ与フルカ如キ政  
府ハ即チ最良政府タルハ必然ナリト虽モ未タ之ヲ以テ最良ノ政  
府ト為スニ足ラズ蓋レ斯ノ如キ政府ハ此善事ヲ舉行スル中ニ  
又迷途ニ陥リ而シテ櫻リニ公益ヲ謀リテ其權限ヲ超ヘルコト  
ルヲ以テナリ

第五章

祖税ノ事ヲ論究スルカ為メニ千八百六十年七月二十  
五日ヨリ二十八日ニ至ル間「ローザ」又「瑞士」ニ於テ  
各國諸大家ノ會合セシ事「千八百六十年十月ノ經濟新  
誌」ヨリ抄録ス

第一節 瑞士聯邦ノ一ナル「ウバウ」ニ於テハ曾テ其財政ヲ改革  
スルコトニ焦心セルヲ以テ祖税ノ事ヲ論題トシテ千八百六十年

九月十五日ヲ以テ終會トナス所ノ點取文會ヲ開設シタリ又此  
時ニ方リ「ローゼー」又ニ於テ「バスカール」デ「ブ」氏ノ首唱ニヨ  
リ「租税ノ事ヲ論究スルカ」為メニ各國諸大家ノ集會ヲ興起セ  
リ同氏ハ「累キニ瑞士國會ノ議負タリ」人ナリ當今ハ「ローザー  
」又「大學校ノ經濟學教員ニシテ且ツ「ブ」ウベル「エ」コノ「ミス」ト  
云フ「經濟ノ事ヲ論究スル新聞社」ノ長タリ  
「寂初」ウ「バウ」ウ「バレー」又「ウ」シヤ「テル」アリ「ブールク」四聯邦ノ有名  
家ヨリ成立セル「一委員」官「府」ニ「ア」テ「ケ」レ「ハ」夫ノ「カ」カール「デ」ブ「ラ  
」氏ノ「始計」ヲ「大ニ」尽力周旋セルヲ以テ各國諸大家、自ラ好ニ  
テ其招キニ應シ「毫」モ政府ノ關係ナクシテ遂ニ「千八百六十年七  
月二十五日」二十六日「二十七日」及「二十八日」ニ會議所ニ集會セ  
レ者殆「二百名」ニ至レリ  
此集會ノ首唱者ハ初メ人ヲシテ此會合ニ意ヲ留メシム可キ報

ハ十五

告ハ曾テ為サ「リ」レ也若シ此報告アラハ其會負益多カル可キ  
ナリ然レニ此集會ハ會負ノ作文及ニ其討論ニヨリテ大ニ盛ニ  
ナリレナリ  
其會負ノ四分ノ三ハ即チ瑞士聯邦ノ人ナリ但シ此聯邦ノ言語  
ハ皆佛語ヲ以テス故ニ此會ニ於テ用フル所ノ語モ亦皆佛語ト  
成リタリ其四分一ハ佛蘭西西班牙伊太里普西亞波蘭日耳曼ノ  
人也其瑞士ヨリ出テタル會負ハ皆有名家ニシテ或ハ其聯邦議  
院又ハ國會ノ舊議負タリシ者アリ又現ニ其議負タル者アリ或  
ハ大學校ノ教員アリ或ハ技術者代言者新聞記者等種々ナリ又  
外國ヨリ來リタル會負中ニモ高名ナル經濟家新聞記者國會議  
員等ニシテ一種ナラザリキ此會合ノ幹事ハ「メ」ース「ル」ウ「バウ  
」聯邦ノ議長長ニシテ大ニ名望アル人ナリ「ミ」エ「ビール」氏「代」言者  
ニシテ又「バ」ウ「聯邦議院」及「瑞士國會」ノ議長「リ」イ「マ」マリ「ア」

後 首

ストル氏〔西班牙ノ高次藏卿〕コントワレテリックスカルベク氏〔波  
蘭ノ舊司法卿〕ロアルキーベホリ氏〔エミリールノ前次藏卿〕エミ  
ードジラルデン氏、バスカールデュプラ氏、ジョセーアガルニエ  
氏、セレブール氏〔代言者〕即チ是レナリ

第二節 此會合ノ議目ハ左ノ如ク定メラレタリ

社會ノ缺ク可ラザル基礎タル正理及ヒ經濟ノ道理ニ適合ス  
ル理財方法ノ原則

方今歐洲諸國ノ會計簿中ニ現ハル、所ノ諸税ノ利害

租税ノ人民ノ財産品行及ヒ安樂ニ影響スル事

是時諸國ニテ舉行セシ理財上ノ改革及ヒ其結果ニ關スル事

右ノ改革ニ於テ資本税歳入税ノ内孰レヲ採用スルニ至リシ

ヤ

往昔ヨリ成立シ來リタル方今ノ諸税ヲシテ單一ノ税ニ歸セ

ハ 十九

シムルヲ得可キヤ

若レ夫レ右ノ如ク數種ノ租税ヲシテ單一ノ租税ニ歸セシム

ルヲ得可キ元是實ニ希望ス可キ事タルヤ

租税ヲ單一ニ歸セシムルハ希望ス可キ事ト爲ス持ハ此單一

税ハ資本ニ賦課ス可キヤ又ハ歳入ニ賦課ス可キヤ

租税ヲ賦課スルニハ均税法ヲ以テス可キヤ或ハ前進税法〔前

篇第七篇第二章ヲ見ル可シ〕ヲ以テス可キヤ

租税ノ事ニ於テ將來完全ノ改革ヲ舉行スルニ至ルマテ先ツ

今舉行ス可キ其一部分ノ改革

其第一議目ハ一決セス第三議目ハ別ニ之ヲ論セス只他ノ

議目ト共ニ之ヲ議シタリ

此會合ニ於テ三箇ノ委員ヲ設ケ以テ衆議ニ附マ可キ議案ヲ製

スルヲ任シタリ其一ハ「コントスカルベーク」氏之ガ長ト成リ



テ總体ノ議案ヲ編成シ一「マルキー」氏之カ長ト成リ  
テ夫ノ一部分ノ改革(第十ノ議目)ノ議案ヲ編成セリ

第三節 直ニ租税ノ事ニ関スル事理ハ右ノ第一委員中ニテ

之ヲ議論シタリ予輩此第五ノ章ハ終テ經濟新誌ヨリ抄録セシモ此ニ予輩ト言フハ即チ新聞記者

ナリハ今左ニ其二論ヲ掲載セシ

抑「レ」ヨセ「フ」カ「ル」ニ「エ」氏此理財論ハ租税ノ主義ヲ定メン「フ」

ヲ欲ス故ニ此會ニ於テ真正ノ租税ハ安寧ヲ保全スル公務ノ代

價ナリト公告スル「フ」ヲ主張シタリ然レ氏該委員ハ多クハ其主

義ヲ確定スルニハ大ニ他事ニ関涉セザルヲ得ズト思考シ又豫

ニ政府ノ職掌ニ就テノ考究ヲ要スルヲ以テ同氏ノ言ヲ用ヒ

ナリキ實ニ該委員中多クハ之ヲ論定スル所ノ預備ナカリレト

思ハル而シテ縱令是レガ預備アリテ之ヲ論定スルモ恐ラクハ

同氏ノ説(經濟ノ道理ニ適ヒ且ツ政府ノ職務ヲ簡約ニシテ民事

ニ多ク干預セザラシムルノ意ニ外ナラス)ヲ可トスルモノ少ナ  
カル可シ

租税ノ主義及ヒ政府ノ職掌ヲ論定スル事ニ就キ「ホル」ニ「ク」氏

「法」字教員ニシテ「ロー」ザ「マ」大學校ヨリ此會ニ遣ハシタル人ハ

右ノ「ジ」ョセ「フ」ガ「ル」ニ「エ」氏ノ説ヲ駁シテ租税ハ之ヲ正當ニ使

用スレバ則チ人民ヲ善道ニ導ク器械ナリ政府ハ「ヘ」セル氏ノ言

ニ如ク社會ノ精神ナリ社會ヲシテ開明ニ赴カシムルモノハ政

府ノ力ニアリ是ヲ以テ諸術宗教教育等ヲ盛ニナラシムルノ事

業ハ即チ政府ノ職掌ナリ又人民ハ其歳入ノ一部分ヲ政府ニ納

ムルハ即チ其義務ニシテ政府モ亦之ヲ徵收スルハ即チ其權理

也、云フ「フ」ヲ論述シタリ

是ニ於テ「レ」シ「セ」フ「ガ」ルニ「エ」氏ハ又左ノ如ク採論セリ「租」税ハ

之ヲ正當ニ設立シ正當ニ使用スレバ則チ各人ノ負債ナリ抑今

後 會

茲ニ論セシトスル所ハ即チ其之ヲ正當ニ設立シ正當ニ使用ス  
ルヲニ在リ若シ夫レ政府ニ宗教ヲ指揮スルノ職掌ヲ許ス時ハ  
乃チ政府ハ人ノ自由ヲ妨害スル者ト云フ可キナリ斯ノ如ク政  
府ノ擅ニ宗教ヲ指揮セハ假令ハ新教ノ國ニアリテハ舊教ノ人  
民ハ悉ク之ヲ追放スルニ至ル可シ旧教ノ國ニ於テモ亦然リ又  
租税ハ政府ノ手ニ在リテハ人民ヲ善道ニ導ク器械ト爲スニ於  
テハ政府ハ壓制ヲ行ヒ以テ人民ノ諸業ニ就キテ妄リニ租税ヲ  
徵收スルニ至ルヤ必然タリ凡ソ租税ノ道德ヲ妨害スルニ至ル  
ト無カテレメ其ル可クザルヤ論ヲ換タスト虽モ又租税ヲ以テ  
法律上ニテ之ヲ保護ス可クサルモノナリ

此會合ニ於テ主トシテ論究セシモノハ數種税、單一税、資本税、歲  
入税、均税、前進税、及ヒ方今成立セル租税ノ改革ノ事ニアリキ

第四節 此會合ニ於テ租税ノ事ニ就テ討論議決セシモノ左ノ

如シ

第一 方今歐洲諸國ニ成立セル數多ノ諸税ヲシテ僅少ノ税  
數ニ減少シ且從來ニ至リテハ單一ノ税ト爲スヲ得ベシ是レ  
シヨセーフガルニエー氏ノ發論ニ係ル

第二 此改革ハ人民ノ自由獨立及ヒ文明ノ進歩スルニ從テ  
漸次舉行スルヲ得ルニ至ル可シ是レ亦シヨセーフガルニエー  
氏ノ說ニ屬ス

第三 租税ヲシテ正當ナラシムル爲メニハ諸般ノ富ニ悉ク  
之ヲ賦課セサル可ラス又資本ト歲入トニ同時ニ之ヲ賦課セ  
加ニ然テ報酬ヲ与ヘズレテ得ル所ノモノニモ之ヲ賦課セザ  
ル可ラス是レ「エミール」ドレラテニ「バ」スカー「ル」テ「ブ」ラ「シ」ヨセー  
フ「ガル」ニ「エ」リ及ヒ「ク」ラ「マ」セ「ラ」シ「ノ」四「氏」ノ「論」說「ニ」係「ル」

第四 右ノ方法ヲ能ク実行シ得ル爲メニハ之ヲ設立セザル

前ニ豫メ經濟ノ原理ヲ世ニ擴布シ以テ衆人ノ謬見ヲ煙滅セ  
サル可ラス(是レ「クラマセラシ」氏ノ論說ニ係ル同氏ハ巴理ノ  
上等裁判所ノ代言者ナリ)

第五 租税ハ均税法ヲ以テ之ヲ賦課セサル可ラス

此會合ニ於テハ「レオンウバル」氏(巴理ノ政談家)及「エトア  
ールセクレタン」氏(「ローサー」又「大学校」ノ法學教員)ハ畢竟單一税  
ニ至ル可ク且資本或ハ歳入ノミニ賦課スヘキ夫ノ簡約税ヲ大  
ニ排撃セリ「シウル」氏ハ資本税ノ便益ナルヲ主張シ「カ  
カール」氏「テュブ」氏「クラマセラレ」ガルニ「エ」ノ三氏ハ特ニ歳入税  
ヲ保庇シタリ

「レオンウバル」氏ハ自己ノ論說ヲ左ノ如ク摘要セリ

單一税ノ疑問ハ實ニ辨明シ難キ疑問ノ一ナリ

若シ夫レ正理ト經濟ノ道理トニ背ナスレテ諸種ノ租税ヲシ

テ單一ニ歸セシメント欲スル時ハ必ズ此單一税ヲ課ス可キ  
モノハ土地ニ在リト思考スルニ至ルヘシ是レ蓋シ理ノ當然  
ト云フ可シ

却ノ如ク諸種ノ租税ヲシテ單一ニ歸セシメ而シテ之ヲ土地  
ニ賦課スルハ容易ニ實際ニ舉行スルヲ得可シ又此事々  
ル農業ヲ害スルヨリハ反テ之ヲ助クルニ至ルベシ

然リト虽モ是レ猥リニ土地ヲ没收スルト一般ニシテ政府ハ  
地主ノ権理ヲ犯カシテ不正ノ強奪ヲ行フト云フ可キ者也

前篇第九篇ニ於テ地稅ノ事ニ就テ論究セシ者ヲ參考ス可シ  
ルコトトスカルベク「氏」ハ予輩ニ贈付セラレタル書中ニ左ノ  
如ク論定シタリ

蓋シ有司專權ノ民信ヲ得且公益ヲ起スヲ主意トスル一政  
府ノ設立ヲ妨害シ又中央集權ノ地方分權ノ擴張ヲ障碍スル

間ハ到底租税ヲ單一ニ歸セシメント欲スルモ得可ラサル也  
マリアバストル氏〔喬キニ西班牙ノ大蔵卿タリシ人ナリ同氏ハ  
シアンシアー、ハ、ラ、コントリ、ビレヨント題セル書中ニ其學問ト  
經驗トノ結果ヲ掲載セリ〕ハ租税ノ一種ノ賦課法ヲ闡陳シタリ  
抑同氏ハ租税ハ單一ニセサル可ラスト論決シ而シテ此單一税  
ヲ賦課ス可キモノハ資本ニ非ス歳入ニ非ス特リ營業ニアルノ  
ミト為セリ然ラハ則チ予輩ヲ以テ見ル時ハ是レ則チ營業税ノ  
方法ニ異ナラサル可レ一新聞記者ハ此事ニ就テ左ノ如ク云ハ  
リ曰ク是レ即チ人民ヲ上中下ノ三等ニ分チ各異リタル税額ヲ  
課スル所ノ分頭税ニ外ナラサル也ト蓋シ此分頭税ハ納税者ノ  
家産ニ比例セサル者ニレテ唯各納税者ノ為メニ政府ノ舉行セ  
ル公務ト此公務上ニ要スル費額トニ比例スルノミ同氏ハ此税  
ヲ賦課スルニハ古ノ新聞記者ノ言ノ如ク實ニ人民ノ等級ニ應

レテ税額ヲ三等一分チ又更ニ之ヲ三等ニ分チタリ

第五節 此會合ニ於テ方今成立スル所ノ租税ニ関スル議案ニ  
就キ衆議決定スル所ノモノ左ノ如シ

一 府税ハ悉ク廢止セサル可ラス

一 支消税ハ素ヨリ然テ人生必須ノ物品ニ賦課ス可ラサルヲ要

ス〔烟草ハ人生必須ノ物品ニアラス〕

一 外國産ノ輸入ヲ禁止スルカ如キ行事ハ悉ク廢棄セサル可ラ

ス

一 支消品ノ製造或ハ販賣ニ関スル專業ハ總テ禁止セサル可ラ

ス

一 軍事ノ十分一税及ヒ賣買税モ亦廢止セサル可ラス

一 眞ニ相續人トシテ入ルベキ物件ヨリ徵收スル租税ハ相續人

ノ其贈与人ニ對スル親屬等級即チ一等親ニ等親ノ遠近ニ隨

後  
人

テ其額ヲ増減スルノ方法ヲ以テ之ヲ設置スルヲ要ス此税ハ  
外國條約ノ眼目ト爲サ、ル可ウス

右ニ開列スル諸税ノ事ニ於テハ前篇第九篇第十篇ニ論述セ  
ルモノヲ参考ス可シ

均税法ノ議論ニ就テ理財論ノ撰人(ジヨセーフガルニエー氏)ハ左  
如ク論述シタリ

歳入税ハ歳入ノ僅少ナル一部分ヲ超過スルヲ無クシテ前進  
ノ比例第七篇第二章ヲ以テ之ヲ徵收セザル可ウス

抑前進税法ニ様ノ方法アリ一ハ前進ニ定限ヲ設ケ且輕少十  
此税額ヲ以テレ一ハ所謂財産平均論黨ノ主張スル所ニシテ前

進ニ定限ナク且ツ重大ノ税額ヲ以テスルモ、也故ニ之カ可否  
ヲ論究スルニハ先ツ此二箇ノ方法ヲ區別セザル可ウス

右ノ「ジヨセーフガルニエー氏」ノ議論ハ「ジウルテン、フィゲロウ、セク

「タニ、」「ヒルビ子」「ウバウ聯邦ノ會議院ノ議案」「ベスケラー」「ウハ

ラドリート大學校ノ經濟學教員」ノ如キ諸氏ハ之ヲ排撃シ又ク  
ラマゼラン「バスカールデュブラ」ノ如キ諸氏ハ之ヲ廻護セシカ

遂ニ之ヲ可トスルノ説ハ多数ニ至ラザリキ  
右ノ外此會ニ附シタル事件ハ銀會期日ノ近キニアルヲ以テ頗

ル簡約ニ議論セシナリ(前進税法ノ事ニ就テハ前篇第五篇第三  
章第七篇第二章及ヒ續篇第八章ヲ参考ス可シ)

### 第六章

瑞士ウバウ聯邦ノ參議院ニテ設立シタル租税ニ就テ  
ノ點取文會

此點取文會(是レヨリシテ又前章ニ述ル所ノ各國會合ヲ開設ス  
ルニ至レリ)ハ參議院ノ一議員ノ建議ト當時該邦ノ税法ヲ改革

スルヲ二人皆焦心セルトヨリテ遂ニ該院ニテ之ヲ設立セリ  
此會ニ寄與シタル文章ハ四十五篇アリ而シテ之ヲ評スル為メ  
ニハ委員ヲ設ケテ之ヲ主管セシメタリ但シ「ジュリーク」諸藝學校  
ノ經病學教員タルセルビュリエー氏ハ該委員中ニテ其評案ヲ起  
ス事ニ任セラレタリ

右ノ四十五篇ノ文章中ニテ五篇ノ文章ハ實ニ估價ヲ以テ撰ス  
ベカラザルモノト評定シタリ然レ氏其賞典ニ至リテハ左ノ如  
ク之ガ順序ヲ定メタリ即チ「ブルドン」氏ノ文章ハ一子「フランク」  
「巴理」ニテ代言者ナル「ウッリ」氏ノ文章ハ八百「フランク」  
「クレマン」  
「スオーグ」ストロアイエー「女氏」ノ文章ハ四百「フランク」  
「著述家」ナ  
ル「レオン」ウハラ「氏」ノ文章ハ三百「フランク」  
「ロミオ」ルト「ド」トル  
「ドーギユ」氏ノ文章ハ二百「フランク」  
是レナリ彼ノ評案ヲ起ス人ナ  
ルセルビュリエー「氏」ノ言ニ拠レバ「ブル」ド「ン」氏ノ論スル所ハ其

文ノ妙巧ナルカ爲メニ甚タ著明ナリ又「ウッリ」氏及ヒ「クレマン」  
「スオーギ」ストロアイエー「女氏」ノ論スル所ハ其議案ニ充分ナリ  
然レ氏「ロアイエー」女氏ハ惜イ哉其論ノ結局ヲ爲サ「リキ」ウハ  
「ウ」氏ノ論スル所ハ租税ノ原理ニアリ「ロミ」ル「氏」ノ論スル所  
ハ特ニ從來ノ事跡ニ關係セリ又「ロアイエー」女氏ハ彼ノ「セル」  
「リエー」氏ノ排撃スル歳入税ヲ可トシ「ブル」ド「ン」氏ハ地方毎ト  
ニ異リタル租税及ヒ土地ノ「ラント」  
「前篇」第九篇第四章ニ詳カ也  
ニ賦課スル租税ヲ設置シ動産ニ課税スル為メニ支消税及ヒ簿  
記税ヲ存シ政府ニテ通路銀行保險船槽採鑛等ノ事業ヲ專行ス  
ル「ジ」可トセリ又「ウ」ハラ「氏」ハ專ラ人ノ論說ヲ比評シ而シテ  
唯漠然トシテ土地ノ「ラント」ニ賦課スル税ヲ可トスルノ「他」ノ  
二氏ノ言フ所ハ既ニ世ニ知ラレタル諸說ヲ撰拔セルモノニ過  
キザル可シ

此點取文會ニ集マリタル諸文章ハ必ス世ニ公布ス可レ而レテ  
其理財學ノ進歩ヲ助クルヤ論ヲ談クサル所ナリ

第七章

資本税 歳入税 歳出税 (前篇第六篇第三章及七篇九篇第  
七章ヲ参考ス可レ)

歳入税ヲ可トスル論者ノ負數中ニ「システアール、ミール」氏ヲ加入  
セサル可ラス同氏ハ理論上ニ於テハ歳入税ヲ以テ最モ正シキ  
者ト爲スカ故也然レ氏又同氏ハ實際之ヲ施行スルニ方リ各自  
其歳入額ヲ報告スルニ其案ヲ以テセザルノ患ヒアリ故ニ此税  
ハ其賦課法ニ不公平ヲ來タス「アル」可キ者ト爲セリ此ニ於テ  
カ同氏ハ此税ノ事ニ就テ左ノ如ク言ヘリ曰ク歳入税ハ臨時ノ  
國費ニ充ツ可キ者トシテ平常之ヲ徵收スル「無ク」其案スル「

テ之ヲ貯一置カザル可ラス抑著シキ臨時費ノ發スルヤ何レノ  
異議何レノ事情アリトモ新々ニ一財本ヲ得ルノ策ヲ設ケテ  
ル可ラザルモノ也ト英國大蔵卿タル「グランドスト」氏モ亦是  
ト畧均シキ論說ヲ縷述セテアリ

此論ヲ詳言スレバ即チ公債ヲ以テスルヨリモ寧ロ歳入税ヲ以  
テ臨時費ヲ補足センニハ其便益固ヨリ多カル可レ(前篇第十六  
篇ヲ参考ス可レ)然レ氏此税ノ徵收法ヲシテ漸次公平ニ歸セシ  
メ且ツ極メテ要用ノ時ニ之ヲ徵收スルニ至ル爲メニハ平常之  
ヲ設立スルヨリモ寧ロ臨時ニ之ヲ設立スルニ若カスト云フニ  
外ナラズ(前篇第九篇第八章ヲ参考ス可レ)

歳入税ヲ設立スルニ際シ各自ノ歳入額ヲ豫定スル「ト」ニ於テ大  
ニ困難ヲ現出シ來ルヲ以テ其歳出ニ課税セントノ議論ヲ發セ  
シ人アリ然リトモ此税ニ於テ其歳出額ヲ豫定スル「ト」ニ就テ

ハ亦歳入額ヲ預定スルノ困難ト均シキ困難ヲ生スルニ至ル可  
レ  
蓋シ支消物ニ賦課スル租税ハ即チ皆各自ノ歳出ニ賦課スル租  
税ニシテ唯其異ナル所ハ之ヲ納ムル人ニ間接ニ係ルト直接  
係ルトニ在ル、ミ其他尚其歳出ニ直接ニ係ル所ノ租税アリ仮  
令ハ僕婢馬車馬犬動産家錢及ヒ家屋其所有主ノ自ラ此ニ住居  
スルノトキニ課セラル、租税ノ如キ品チ是レナリ  
レオニウハ「氏」ハ資本税ト歳入税トノ相類似シ且ツ相異ナ  
ル所以ヲ能ク説明シタリ今同氏ノ言フ所ヲ掲示スル「左ノ如  
シ  
茲ニ人アリ其家錢ヲ支給スル一年幾許ナルヤト問フニ一千  
フランクナリト答フ然ラハ則チ彼レノ歳入殆ント五千フラン  
クト假定レ以テ其一年ノ税額ニシテ其十分一即チ五百フラン

ク「ラ」単ニ直接ニ納メレム是レ即チ歳入税ナリ  
又彼レノ所有スル土地家屋鉄道會社ノ株券家財衣服器械等ノ  
價格ハ總テ幾許ナルヤト問フニ殆ント十フランクト答フ然  
ラハ則チ其一年ノ税額トシテ其百分一即チ一フランクヲ  
単ニ直接ニ納メレム是レ即チ資本税ナリ  
以上歳入税ト資本税トノ相類似スル所以ナリ  
歳入税ト資本税トノ相異ナル所以ハ即チ左ノ二事ニ根基セリ  
第一歳入税ニ於テハ各人ノ納ム可キ税額ハ其歳入額ニ由テ之  
ヲ算定スルト虽モ資本税ニ於テハ其資本ノ總價格ニ由テ之ヲ  
算定ス  
第二 歳入税ニ於テハ人ノ能力ヨリ生スル所ノモノモ尚ホ歳  
入ノ一部分ト看做スト虽モ資本税ニ於テハ此能力ヲ以テ資本  
ノ一部分トハ看做サレナリ



是ヲ以テ之ヲ觀レハ歲入税ハ賃銀利益及ヒ賃地料ニ均シク關  
スト雖モ資本税ハ人ノ能力ヲ含テ問ハサルガ故ニ勤勞及ヒ賃  
銀ニハ關セサルモノナリ  
次章ニ於テ前進税法ト歲入税トノ關係ニ就テ論スル所ヲ參考  
ス可シ

### 第八章

前進税エムボロウツクシヤ（前篇第七章第二章ヲ見ルヘシ）

#### 第一節 前進税ノ實行

往古雅典ニ於テ歲入税ヲ設立シ而シテ前進ノ方法ヲ以テ之ヲ  
徴收シタリ（此事ハ「モンテスキウ氏」ノ著シタル萬法精理中ニアリ）  
近世ニアリテハ共和國佛稜フロランスニ於テ收メトシテ此前進税ヲ實行  
シタリ

現今ニ至リテハ獨逸ノ二三聯邦ニ於テ適宜ノ方法ヲ以テ之レ  
ヲ實行セリ又巴華里ババリエールニ於テハ千八百四十八年六月四日ノ法令  
ヲ以テ歲入税ヲ設立シ而シテ二百五十フロリニ以上ノ歲入額  
ヲ二十五等ニ分チ其最モ下等ノ歲入額（即チ二百五十フロリニ  
ニ就テハ其二厘百分ニ分ノ税ヲ課シ其最モ上等ノ歲入額ニ就テ  
ハ其二分百分ノ二分ノ税ヲ課シ以テ前進ノ比例（六ナル歲入額ニハ小

ナル歳入額ノ比例ヨリモ漸次多量ノ税額ヲ徴收スルヲ云フ  
ニテ此税ヲ徴收セリ  
英国ノ歳入税ハ之ヲ徴收スルニ節度アル前進税法ヲ以テセル  
モノト謂フヘシ尙トナレハ百磅(二千五百フランク)ノ歳入額ニ  
就テハ之レカ税ヲ省フキ而シテ百。一磅ヨリ百五十磅ニ至ル  
歳入額ニ就テハ百五十一磅以上ノ歳入額ヨリ漸次少ナキ比例  
ノ税額ヲ賦課スルヲ以テナリ  
伊太里ノ「ヒエモノ」ニ於テハ千八百五十三年四月二十八日ノ  
法令ヲ以テ家錢税ニ於テ税額ノ最モ少ナルモノハ家錢ノ四分  
最大ナルモノハ一割二分ト定メ以テ前進ノ比例ニテ之レヲ徴  
收スルヲ公布シタリ

佛國ノ巴理府及ヒ其外ニ於テモ亦タ家錢税ヲ徴收スルニ前進  
ノ比例ヲ以テセリ巴理府廳ノ施行セル前進ノ比例法ハ千八百  
六十一年八月三十一日ノ法令ヲ以テ確定スル所ナリ今之レヲ  
揭示スルヲ左ノ如シ

巴理府ニ於テ二百五十フランク以下ノ家錢ハ免税タリ但シ  
營業者ノ建物内ニテ其住居ニ供シタル一部分ノミノ家錢ニ  
就テハ二百五十フランク以下ノモノト虽モ百分ノ三ノ税ヲ  
徴收ス(英国ニ於テハ十磅以下ノ家錢ニ至リテハ之レカ税ヲ  
免除ス)  
二百五十フランク以上四百九十九フランク以下ノ家錢ニ就  
テハ其税額百分ノ三  
五百フランク以上九百九十九フランク以下ノ家錢ニ就テハ  
其税額百分ノ五  
千フランク以上千四百九十九フランク以下ノ家錢ニ就テハ  
其税額百分ノ七

千五百フランク以上ノ家錢ニ就テハ其税額百分ノ九

佛國國民<sup>ゴロウシヨウ</sup>合約政ノ時ニ際シ千七百九十三年三月十八日ニ於テ動

産不動産ヲ問ハス諸般ノ富ニ前進ノ比例ヲ以テ賦課スル一税ヲ

設立スルヲ確定シタリ然レモ實際之ヲ施行セサリシナリ

又千八百四十八年佛國<sup>フランス</sup>建國集會ニ前進ノ比例ヲ以テ徵收スル

相續税ヲ設立セシメテ建議セシ人アリシカ其集會ノ委員ハ之

レヲ排斥シタリ此委員中ニテ之レヲ可否スル考案ヲ起セシ人

ハバロイウ氏ナリト云ヘリ

正理上ノ見ヲ以テスレハ前進税法ノ均税法ニ勝ル事ハ既ニ千八百

四十八年四月三十日佛國<sup>フランス</sup>假政府ニテ抵當アル債金ニ課スル一税ヲ

設立スルヲ就キ發セシ法令ノ前文ニ於テ之ヲ明言シタリ

千八百五十七年十一月經濟新志ニ租税ノ事ヲ論述セルアリ其

文中ニ曰ク佛國大變革以前ニ在テハ總テ租税ハ均税法ヲ以テ

之レヲ徵收セリ故ニ當時ノ租税ハ皆不正ノモノナリ實ニ租税

ヲシテ至正ノモノタラシムル為メニハ之レヲ徵收スルニ前進

税法ヲ以テセサル可ラス予輩ハ既ニ之レヲ公論セシヲ以テ共

和政府<sup>佛國大變革後政府ヲ云フ</sup>ハ必ス其第一回會計法令ヲ以テ之レヲ実行ス

ヘシト

此論ハ右ノ共和政府ノ大藏卿<sup>ガルニエーバゼ</sup>氏及ヒ國務卿

シケレルク氏ハ之レヲ可トセリ

佛國及ヒ英國ニ於テハ相續税ヲ徵收スルニ左ノ如キ前進ノ比

例法ヲ以テセリ

佛國ニ於テハ千八百五十年以來左ノ比例法ヲ以テス

直系親ノ者ノ受ヘキ遺物ニ於テハ其税額百分ノ一

夫ノ受クハキ妻ノ遺物又ハ妻ノ受クヘキ夫ノ遺物ニ於テ

ハ其税額百分ノ三

兄弟姉妹伯父甥ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ六半

四等親以外ノ親屬ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ

九以親族ニ非サル者ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ

英國ニ於テハ千八百五十三年以來左ノ比例法ヲ以テス

直系親ノ者ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ一

兄弟或ハ兄弟ノ子孫ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分

ノ三祖父母ノ子孫ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ

六親族ニ非サル者或ハ外國人ノ受クヘキ遺物ニ於テハ其稅額百分ノ十

巴理ニ於テハ葬禮ノ用具及ヒ劇場ノ客床ニ関スル租稅モ亦々

前進ノ稅法ヲ以テ之レヲ徵收セリ但シ其葬禮ノ用具ニ於テ虛

飾ニ涉ルモノ及ヒ劇場客床ノ上等ノモノニ就テハ其粗畧ノ用

具及ヒ下等ノ客床ニ對シ<sup>著シキ</sup>差等アル前進ノ比例ヲ以テ之レカ稅

ヲ徵收ス又佛國ニテ烟草稅ニモ此前進稅法ヲ適用セリ然レモ

其前進ノ行情ハ反對ノ前進ニシテ乃チ廉價ノ烟草ニ随ツテ愈

稅額増加スルモノナリ曾テ予輩カ經濟社ニテ同社莫タル<sup>テ</sup>ユビ

イ氏ニ談社ニ於テ此烟草稅ノ議論アリレ後々ニ書送リシ文ヲ

今又茲ニ掲載ス

七月六日ノ集會ニ於テ烟草稅ノ議論アリシ時ニ予輩ノ說ニ

背馳スル論ヲ主張スル人ハ左ノ言ヲ以テ此稅ヲ至當ノモノ

ト為サント欲シタ<sup>テ</sup>曰ク若シ夫レ上等ノ烟草ニ尋常ノ烟草

ヨリモ多量ノ稅ヲ課スル片ハ乃チ富者ハ貧者ヨリモ多ク稅

ヲ出スニ至ルヘシト是レ實ニ甚タレキ謬說ト謂フヘシ予輩

大藏省

ノ見聞スル所ニ據レハ烟草製造費其販賣價格及ヒ其各種ノ  
 稅額ハ左ノ表ノ如シ但シ此稅額ハ其製造費ト販賣價格トノ  
 差ヲ以テ之レヲ算ス佛國ニ於テハ從テ烟草ハ政府ニテ之ヲ製造シ且ツ之  
 レヲ販賣ス故ニ其製造費ト販賣價格トノ差ハ即チ改  
 府ノ利益ニシテ又即チ  
 烟草ノ租稅ナリ

烟草	製造費 量一キログラムノ	販賣價格	百フランクニ對スル 稅額ノ比例
尋常ノ鼻烟草	五フ四〇サ	八フ一	四七一フ
尋常ノ吸烟草	一フ六〇サ	八フ一	四〇〇フ
〇五ノ卷烟草	三フ二五サ	一ニフ五〇サ	二八五フ
一〇ノ卷烟草	一〇フ三〇サ	二五フ一	一四三フ
一五ノ卷烟草	二ニフ一	三七フ五〇サ	七〇フ
二〇ノ卷烟草	三ニフ五〇サ	五〇フ一	五四フ
二五ノ卷烟草	三セフ五〇サ	六ニフ五〇サ	六七フ

①ハ「フランク」(セ)ハ「サンチー」ノ畧ナリ又。五。一。〇。等ノ卷烟草トハ其品位  
 ヲ示ス記号ナリ  
 此稅ノ反對ノ前進ナル「ハ右ノ表ヲ以テ明カナリ實ニ下等  
 ノ烟草ニ於テハ上等ノ烟草ニ於ケルヨリ其稅額ノ多キ「七  
 倍乃至八倍ニ至レリ加之三。或ハ四〇ノ如キ一層上等ノ卷  
 烟草ニ於テハ其稅額愈減少スルヲ以テ是等ノ精品ノ稅額ト  
 最モ下等ノ粗品ノ稅額トヲ比較セハ知ラス此粗品ノ稅額ノ  
 多キ「七樂倍ナルヤ

總テ間稅ハ皆斯ノ如キ反對ノ前進貧者ハ富者ヨリモ反テ多  
 量ノ稅ヲ出ス「フ云フトナ  
 ルモノナリト出「フ「ハ予輩既ニ之レヲ論述シタリ前篇七篇第  
 二章及ヒ第十一篇第一章ヲ見ルヘシ  
 二三年以前「バ「ビ「氏ハ稅法ヲ改革スル為メニ設ケタル委員  
 ニ進呈セシ建白書中ニ馬車稅ハ特ニ貧賤ナル旅客ニ多ク係ル  
 ノ事實ヲ論述シタリ

第二篇 前進税法ヲ保庇セル論說  
「モンテスキウール」  
「リ」ベドセーシピエル「ミンドルセ」  
「アダムスミット」  
「ジベセ」  
「ロシ」  
「シエスミール」  
「エルファセ」  
「九氏ノ論說ナリ」  
「モンテウキウ」氏ハ往昔雅典ニテ設立シタル前進税法ヲ以テ徵收スル租税ヲ可トシテ左ノ如ク言ヘリ此税ハ人ノ財産ニ比均セサルモ至正ノモノナリ蓋シ其財産ニ比均セサルモ其要用ニ比均スルヲ以テナリ抑人タルモノ各同ニノ必要アルモノナリ然リ而シテ此必要ニ供スル財産ハ租税ヲ課スヘカラサルモノナリ此必要ニ供スル財産ニ次クモノハ即チ便益ヲ得ル為メニ要スル財産ニシテ是レニ至リテハ課税セサル可ラス但シ奢侈ノ用ニ供スル財産ニ於ケルヨリモ一層之レヲ輕クナラシメザル可カラス然レ氏斯ノ如ク奢侈ノ用ニ供スル財産ノ税ヲ重クスレハ則チ此財産ノ増殖ヲ妨害スルニ至ルヘシ

「シシ」ル「ト」氏ハ同氏ノ編輯セル諸學字林中經濟ノ條ニ於テ左ノ如ク言ヘリ租税ヲシテ莫ニ比均セシムル為メハ帝ニ納稅者ノ財産ニ比例シテ之レヲ徵收スルノミナラス猶ホ其分限或ハ其財産ノ奢侈ニ屬スルモノノ數量ニ比例シテ之レヲ徵收セザルヘカラス  
「ベルナル」デンドセーシピエル氏モ亦々前進税法ヲ可トスル論者ノ一人タリ又「コンドルセ」氏ハ十七百九十年其著述ノ一章ヲ以テ特ニ租税ノ事ヲ論究シ而シテ各自ノ歲入額ニ課税スル丁ニ於テ其必要品ヲ購求スルカ為メニ要スル金額ニ相當スル歲入額ハ之レカ税ヲ除キ此金額ヲ超過スル歲入額ニ就テハ其數ニ比例シテ之レカ税ヲ課シ又此歲入額一層大ニシテ或ル境界ヲ超過スルモノハ此超過セシ數ニ復々別ニ課税スヘシ然レ氏適宜ニ之レカ限界ヲ立テ歲入額ノ大ナルモノニ隨ッテ限リニ其税ヲ重クスル丁ナ

ク以テ富者ノ其財本ヲ増殖スルヲ妨害スルヲナカラシメ又之  
レヲ隱匿シ或ハ外國ヘ移轉スルヲナカラシメサル可ラスト陳述  
シタリ蓋シ同氏ハ富者ハ貧者ヨリモ社會ノ利益ヲ受ルヲ多シト  
思想セリ。千七百九十三年六月ノ「ジュルナル」デニストリユクシヨニリシア  
ト云フ新聞紙及ビ同氏ハ「ウーブル」ト題セル書ヲ見ルヘシ。  
按スルニ彼ノ「シジルソー」氏及ビ「ベルナル」デンドセーニピア  
此氏ハ經濟學ノ大家ト謂フヘキ人ニアラサルナリ然レモ彼ノ  
「モンテスキウ」氏及ビ「コンドルセ」氏ハ人ヲシテ其論スル處ニ  
意ヲ留メシムルホドノ名望アル人ナリ

「パリーウ」氏カ「モンテスキウ」氏ノ論ニ就テ言ル「アリ曰ク蓋シ  
大人ト虫ト時ニヨリ大ニ誤解スルヲアルモノナリ殊ニ租稅論  
ニ至リテ屢之レアリ實ニ「モンテスキウ」氏ノ彼ノ論說ハ前進  
稅法ヲ保庇スルカ為メナリト虫ト其終尾ニ於テ奢侈ノ用ニ供

スル財產ノ稅ヲ重クスレハ則チ此財產ノ増殖ヲ妨害スルニ至  
ルヘシトハ一言アルヲ以テ反ツテ之レヲ駁撃セシモノ、如シ  
ト「モンテスキウ」氏ノ前進稅法ヲ保庇スル論ノ末ニ於テ此一言  
ヲ吐露セシハ實ニ誤マレシモノト謂フヘシ然リト雖モ一説ニ  
就テ此ノ誤アルモ之レカ為メニ其全說ノ聲價ヲ下ス「ナカル  
ヘキナリ

經濟家ノ中ニテ最モ高名ナル「アダムスミツ」及ビ「ジ、ヘセ」ノ二  
氏モ亦々前進稅法ヲ可トセル論者ノ内ニ算入スルヲ得ヘシ  
「アダムスミツ」氏ハ別ニ此前進稅法ノ事ヲ論セサリシモ他事ヲ  
論セシ時ニ方リテ左ノ如ク言シ「アリ

富者ハ其歲入額ノ比例ヲ超ヘテ國費ヲ補助スルハ不道理ニ  
非ルヘシ  
「ジ、ヘセ」氏ハ確然前進稅法ヲ保庇セリ而シテ之レヲ説破スル

論者ニ屢之レカ答辨ヲ為セシテアリ是故ニ同氏ハ其著述ニ於テ左ノ疑問ヲ掲載セリ

尋常ノ均税法ヲ以テ徵收スル租税ハ貧者ニ於テハ富者ニ於

ケルヨリモ一層重クアルニアラサル乎自己ノ家族ヲ養フ為

メニ必要ナル包麵ノ代價ノ外ニ得ル処ナキ人ハ非凡ノ才能

ト巨大ノ財産トヲ有スルニ據リテ自身ハ勿論其子孫ニマテ

モ歡樂ヲ得セシメ尚且毎歲其財本ヲ増殖スル人ト同シキ

比例ヲ以テ租税ヲ出サ、ルヲ得サル乎斯ノ如キ時ニ於テハ

公平ト云フ眞理ニ背馳スルモノアルヲ看出サ、ル乎

同氏ハ其經濟論ト題セル著述ニ於テハ尙一層明瞭ニ之レヲ論

述セリ蓋シ其之レヲ論述スルヤ同氏ノ設為セシ租税ノ事ニ関

スル原則ノ第三則續篇第二章ノ終尾ヲ見ルヘシテ擴充シ且正

當ト云フ原理ニ根據セシモノナリ今左ニ之レヲ揭示セントス

夫レ一人或ハ一家ノ其生活ニ充分ナラサルカ如キ甚々僅少

ノ歳入ヲ有スル者アリ又其諸エル情欲ヲシテ悉ク達セシム

ルトヲ得ルカ如キ巨大ノ歳入ヲ有スル者アリ此二者ノ間々

ニ亦々無數ノ等級アリ然リ而シテ其各等給毎トニ稍其奢侈

ニ涉ル情欲ヲ達スルニ至ルモノナリ善シ夫レ租税ノ彼ノ生

活ノ為メニ全ク費耗シテ尚充分ナラサルカ如キ僅少ナル歳

入ニ係ルニ随ツテ倍税額ヲ減少スルノ方法ヲ以テ各人ニ之

レヲ賦課セント欲セハ則チ只尋常ノ比例ヲ以テスルトナク

前進ノ比例ヲ以テ税額ヲ減少セサル可ラス

假令ハ茲ニ尋常ノ比例法ヲ以テ各自歳入ノ十分一ヲ徵收ス

ル租税アリト假想スレハ則チ三十萬フランクノ歳入アル人

ニ就テハ三萬フランクヲ徵收スヘシ然ラハ則チ此人ノ一年

ニ費スヘキ金額二十七萬フランクアリ斯ノ如キ歳入額ヲ以



テハ善ニ其生活ノ為メニ要スルモノ一トシテ缺ク所ナキノ  
ミナラス尚生活ノ為メニ必要ナラサル種々ノ歡樂奢侈ヲ為  
スニ足ルヘシ然レハ三百フランクノ歳入アル人ハ其税三十  
フランクヲ納ムレハ則チ其一年ニ費スヘキモノ僅カニ二百  
七十フランクアルノミ方今予輩人民社會ノ風俗ニ就テ見ル  
キハ斯ノ如キ歳入額ヲ以テハ生活ノ為メニ甚々缺クヘカラ  
ル所ノモノヲ缺クニ至ルヘシ是ニ由テ之ヲ觀レハ唯尋常  
ノ比例法ノミヲ以テ徴收スル租税ハ之レヲ至當ノモノト看  
做スヲ能ハサルヘシ曾テ「アダムスミス」氏ノ富者ハ其歳入額  
ノ比例ヲ超ヘテ國費ヲ補助スルハ不條理ニ非サルヘシト言  
ヒシハ即チ此意ニ外ナラサルナリ予輩ハ尚一步ヲ進メテ至  
當ノ租税ト稱スヘキモノハ斷シテ唯前進税法ヲ以テスルモ  
ト云フナリト言ハストス

前進税ハ人ヲシテ財本ノ増殖ヲ助ケル所ノ勤勞ト貯蓄トヲ  
怠ルニ至ラシムルカ如キ有害ノ結果ヲ来タスモノナリト言  
フ論者アリ然リト雖此税ハ各自ノ財本及ヒ其増額ヲ全ク  
徴收スルモノニアラス唯其一小部分ニ過キサルモノニアラ  
スヤ然ラハ則チ何ソ此税ノ為メニ各自其財本ヲ増殖スル  
ヲ怠ルニ至ルヲアラシヤ實ニ今或其財本ヲシテ更ニ一千フ  
ランク増加セシメハ則チ夫ノ前進ノ比例ニ據リテ其税額モ  
亦々更ラニ二百フランク増加スト雖此其財本ノ増額ハ其税  
ノ増額ヨリモ遙カニ大ナルヲ以テ其財本ヲ増加セント致々  
焦心スルヲ論待タサルナリ

ロシト氏ノ此前進税ニ就テ言ヘルヲアリ曰ク總テ前進税ハ其  
前進<sup>税額漸ク増</sup>加スルヲ適宜ノ定限アルニ於テハ正當ノモノト謂フヘ  
シ然レ氏定限ナキ前進税ハ施行スヘカラサルモノナリ何トナ

大藏省

レハ斯ノ如キ前進税ハ忽チ財本ヲ破滅スルニ至ルハキモノナ  
レハナリト  
「カンフーセ」氏ハ十八百四十八年ニ於テ總テ動産税ハ悉ク  
前進ノ比例ヲ以テ之レヲ徴收セン「ヲ」開陳シタリ但シ「マ」ク  
キロー「ウ」氏甚タレキ守舊論ナル經濟家ハ能ク之レヲ可トセザ  
リキ

「」スチ「ニ」アル「ミ」ハ氏ハ總テ租税ハ悉ク前進税法ヲ以テ之レヲ  
徴收セサル可ラスト為ス論者ニアラス唯相續税ノ「ミ」ハ其税法  
ヲ以テ徴收スル「フ」ヲ可トセリ乃チ同氏ノ言ヘル「フ」アリ曰ク予  
カ見ル処ヲ以テスレハ夫「」前進税法即チ大ナル金額ニ随テ小  
ナル金額ヨリモ稍強キ比例ヲ以テ之レカ税ヲ徴收スル方法ハ  
諸般ノ租税ニ悉ク之レヲ適用スル事ニ就テハ少シク異議ナキ  
能ハス然レ「」氏特リ之レヲ相續税ノ「ミ」ニ適用スルハ至當ニシテ

且有益ナルヘシト

然リト雖「」氏同氏ハ未タ確然此異議ヲ陳述セシ「」ト「」唯土地政  
府ニ對スル貸金、抵當アル貸金、諸會社ノ資業金ニ此税法ヲ適用  
スルノ不可ナル事ノ「ミ」ヲ説明セリ曾テ同氏ハ財産ノ不同ヲ減  
少シ漸次ニ之レヲ一樣ナラシムル為メニハ此前進税法ハ大ニ  
便益アルモノナリトノ言ヲ以テ此税法ヲ保庇スル論說ヲ辨駁  
セシ「」アリ同氏ノ斯ノ如キ辨駁セシハ實ニ至當ト謂フヘシ蓋  
シ斯ノ如キ財産ヲ平均ナラシメントスル論者ノ保庇スル前進  
税法ハ昂チ夫ノ定限ナク妄リニ増加スル不正ノ前進税法ナレ  
ハナリ然レ「」氏定限アリテ妄リニ増加セサル真正ノ前進税法ニ  
至リテハ之レカ辨駁ヲ為ス「」能ハサルモノナリ  
「ミ」ル氏ハ只尋常ノ比例法ヲ以テ徴收スル租税ノ其納税者ニ  
感觸スルノ情形如何ニ関シテハ断然之レヲ辨明セシ「」トナシ而

裁省

レテバンタシ氏ノ説ク所ニ雷同シテ左ノ如ク言ヘリ  
抑租税ヲ徴收スルニ方リ各人ノ欵失スル所ヲシテ平等ナラ  
シメサル可ラスト云フ原理ニ根據スルニ於テハ先ツ各人ノ  
歳入額ニ比例シテ譬ハ其百分ノ十ヲ一樣ニ徴收スルキハ  
即チ此原理ハ實行セラルモノナルヤ否ヲ考究セサルヘカ  
ラス論者多クハ小ナル歳入額ノ十分一ヲ出ス者ハ大ナル歳  
入額ノ十分一ヲ出ス者ヨリモ其缺ク所アルト多シト云ヒ以  
テ斯ノ如ク唯尋常ノ比例法ヲ以テ租税ヲ徴收スレハ則チ此  
原理ニ背馳スト主張セリ是レ則チ夫ノ前進ノ比例法即チ大  
ナル歳入額ニ從ツテ小ナル歳入額ヨリモ稍強キ比例ヲ以テ  
徴收スル税法ノ由テ生スル所以ナリ蓋シ自己ノ小ナル歳入  
額ノ十分一ヲ出ス者ハ大ナル歳入額ノ十分一ヲ出ス者ヨ  
リモ其缺ク所アルト多シト為スハ即チ小ナル歳入ヲ有スル

者ハ其税ノ為メニ生活ニ必要ナル物品ヲ省減セサル可カラ  
ザルモ大ナル歳入ヲ有スル者ハ其税ノ為メニ唯奢侈ニ屬ス  
ル物品ヲ省畧スルノミニシテ敢テ必要品ヲ省減スルトナシ  
ト云フトニ根基セルモノナリ假令ハ今一万磅ノ歳入ヲ有ス  
ル者ニ其税トシテ一年ニ其十分一即チ一千磅ヲ徴收スルモ  
之レカ為メ彼レ敢テ其生活ニ必要ナル物品ヲ欵クニ至ル  
トキノミナラス其情意ヲ慰スル為メノ物品ト雖モ尚著シク  
欵クニ至ルトナカルヘシ然レモ僅カニ五十磅ノ歳入ヲ有ス  
ル者ニ其十分一即チ五磅ヲ徴收スレハ則チ之レカ為メニ彼  
ノ著シク欵ク所アルト右ノ一万磅ノ歳入ヲ有スル者ノ類ト  
アラサルナリ  
尋常ノ比例法ヲ以テ租税ヲ徴收スレハ則チ斯クノ如キ不公  
平アリ乃チ之レヲ湮滅セシムヘキ方法ト最モ至正ノモノト

認得スルモノハ即チ「バンタシ」氏ノ説ク所ノ方法ニアリ抑此  
方法ハ恰モ生活ノ為メニ必要ナルモノヲ得ルニ足ルヘキ歳  
入額仮令ハ五十磅ヲ零度ト定メテ之レカ税ヲ省キ而シテ此  
零度ヲ超ユルモノハ則チ其超過セシ金額ノミニ之カ税ヲ賦  
課スルヲニアリ故ニ其税額仮令ハ十分一ナルハ六十磅ノ  
歳入ニ就テハ即チ其中ヨリ右ノ五十磅ヲ除去シ其十磅ヲ以  
テ真ノ歳入ト看做シ而シテ一年一磅ノ税ヲ出タサシメ又一  
十磅ノ歳入ニ就テハ九百五十磅ヲ以テ真ノ歳入ト看做シ而  
シテ一年九十五磅ノ税ヲ納メシム斯ノ如キ方法ヲ以テセハ  
即チ各自ノ納ムル租税ハ其生活ノ為メニ必要ナラサル歳入  
額ニ比例セルモノト謂フヘシ  
ブルードン氏ハ前進税法ヲ排斥セル人ト雖<sup>レ</sup>次ノ第三節ヲ見  
ルヘシ其近時著ハセル租税論ト題スル書中ニ傍系親ノ者ノ受

クヘキ遺物税家屋税及ヒ新聞紙ノ印税ニ就テハ前進税法ヲ以  
テ之レヲ徴收セン<sup>ト</sup>ヲ論述セリ但シ同氏ハ僅少ナル遺物及ヒ  
寡婦小兒ノ受ヘキ遺物ニ就テハ之レカ税ヲ省フキ其他ノ遺物  
ニ就テハ其價值ト其相續人ノ親屬等級トヲ斟酌シタル前進ノ  
比例ヲ以テ之レヲ徴收セン<sup>ト</sup>ヲ欲シ又家屋税(同氏ハ坪数道路ノ  
居所階数大區ニ随ツテ税額ヲ異ニセリ)ヲ以テ人民ノ一所ニ聚  
集スルノ弊害ヲ防止スル為メノ最良ナル手段ト看做シ又營業  
税ハ起業者ニ関シテハ其資金及ヒ其使用セル職人ノ員数ニ就  
テハ尋常ノ比例ヲ以テシ其土地ノ良否ニ就テハ前進ノ比例ヲ  
以テ之レヲ徴收シ而シテ職人ニ関シテハ此税ヲシテ甚々僅少  
ナラシメ又新聞紙税ハ其報告及ヒ前金約定ノ員数ニ随ツテ前  
進ノ比例ヲ以テ之レヲ徴收スルハ至當ナリト言ヘリ

第三節 前進税法ヲ排斥セル論說

論者ノ中ニハ前進税法ヲ排撃スル者尠シトセス然レモ彼等ハ  
概テ尋常ノ比例ト定限アル前進ノ比例トノ二者ヲ比較シテ其  
利益正否ヲ論究スル<sup>ト</sup>甚々稀レニシテ唯定限ナキ過度ナル前  
進ノ弊害ヲ表出スル<sup>ト</sup>ノミニ殆ント從事シタリ此二者ノ利害  
正否ヲ明瞭ニスル<sup>ト</sup>ハ實ニ方今有益ノ論題タリ

此前進税法ヲ排撃セル論説ハ左ノ著述ニ就テ見ルヘシ

民撰議院ノ議復タリシ<sup>シ</sup>リウベ<sup>ト</sup>氏ノレンポール石ゲレシ<sup>ト</sup>  
<sup>ト</sup>エ<sup>ル</sup>モ<sup>ル</sup>セルマ<sup>デ</sup>パトリオチス山ト題セル書<sup>千七百九</sup>  
十三年刊行

ル<sup>ト</sup>デレ<sup>ト</sup>氏ノ<sup>シ</sup>ウル<sup>ト</sup>ナ<sup>ル</sup>デ<sup>コ</sup>ノ<sup>ミ</sup>！<sup>ポ</sup>リ<sup>チ</sup>ク<sup>ト</sup>題セル  
書其第一卷ノ第二百十七枚ヲ見ルヘシ千七百九十六年ノ刊  
行

イ<sup>ラ</sup>チ<sup>キ</sup>エ<sup>ト</sup>氏ノ<sup>ト</sup>レ<sup>ト</sup>テ<sup>ト</sup>ド<sup>ラ</sup>フェ<sup>ル</sup>セ<sup>ト</sup>ヌ<sup>ブ</sup>ブ<sup>リ</sup>ク<sup>ト</sup>

題セル書其第二卷ヲ見ルヘシ千八百三十八年ノ刊行

フ<sup>ラ</sup>ン<sup>シ</sup>ド<sup>コ</sup>ル<sup>セ</sup>ル<sup>ト</sup>氏ノ<sup>ル</sup>ビ<sup>ニ</sup>テ<sup>ウ</sup>モ<sup>シ</sup>ト<sup>ト</sup>題セル書

千八百三十三年四月一日刊行

エ<sup>ジ</sup>ン<sup>ブ</sup>ル<sup>グ</sup>レ<sup>ウ</sup>ビ<sup>エ</sup>ト<sup>ト</sup>題セル書其第四百十三枚ヲ見

ルヘシ千八百三十三年四月刊行

パ<sup>レ</sup>ト<sup>氏</sup>ノ<sup>編</sup>輯<sup>シ</sup>タル<sup>テ</sup>ク<sup>シ</sup>ヨ<sup>子</sup>ル<sup>ド</sup>レ<sup>コ</sup>ノ<sup>ミ</sup>！<sup>ポ</sup>リ<sup>チ</sup>

クト云フ字書其租税ノ部ヲ見ルヘシ

ビ<sup>ニ</sup>イ<sup>ノ</sup>ド<sup>氏</sup>ノ<sup>ド</sup>ラ<sup>モ</sup>子<sup>ト</sup>テ<sup>ゲ</sup>レ<sup>テ</sup>エ<sup>ト</sup>レ<sup>ン</sup>ポ<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>題セル

書其第二卷ノ第九十三枚ヲミルヘシ

千八百五十七年十一月經濟新誌ニ登録シタル<sup>パ</sup>リ<sup>イ</sup>ウ<sup>氏</sup>ノ

エ<sup>チ</sup>エ<sup>ト</sup>ド<sup>シ</sup>ユ<sup>ル</sup>ル<sup>シ</sup>ス<sup>テ</sup>ト<sup>ハ</sup>テ<sup>ン</sup>ポ<sup>ト</sup>ト<sup>ト</sup>題セル論説書

ブル<sup>ト</sup>ド<sup>ニ</sup>氏ノ<sup>財</sup>産<sup>平</sup>均<sup>論</sup>ニ<sup>本</sup>キ<sup>テ</sup>租<sup>税</sup>論<sup>ト</sup>題セル其終リノ

著述<sup>千八百六十一年十月刊行</sup>ニ於テ酷ニ前進税法ヲ駁撃シタ

大蔵省

リ但レ此祖稅論中ニ説ク所ハ是ヨリ先キ千八百四十五年其ト  
ラジクシヨニエゴノミクト云フ書中ニ論セシ所ト全ク同一ナ  
ルモ千八百四十八年七月二十一日同氏ノ建國集會ニテ演説セ  
シ論トハ大ニ反對セリ蓋シ同氏ノ駁撃セル所ノ前進稅法ハ夫  
ノ定限アリテ妄リニ増加セサルモノニアリ然リ而シテ之ヲ駁  
撃スル所以ノモノハ之レヲ以テ財產ヲ平均スルニ足ラヌ唯仁  
者ヲ以テ自ラ任セル人ノ空論ヲ盛ニナラシムルニ過キサルモ  
ノト為スニ根セリ

又同氏ハ前進稅法ヲ批評シテ大蔵ノ遊戲ト為シ且欺詐ト為セ  
リ乃チ其言ニ曰ク前進稅法ト云フ此玩物ヲ以テ衆人ヲ慰スル  
トハ何レノ時ニカ之レヲ止ムルニ至ルヤ抑前進稅法ハ政府ノ  
祖稅ヲ賦課スルニ方リ殊ニ賤民ヲ慈愛スルノ意ヲ以テスト云  
フト富者ハ貧者ヨリモ強キ比例ニテ祖稅ヲ納メ以テ其義務

ヲ盡クスル云フトトテ示スル為メニ過キサルナリト  
同氏ハ前進稅法ヲ排撃スルト斯ノ如ク甚レ甚クト云フマタ  
傍系親ノ者ノ受ベキ遺物家屋營業新聞紙ニ関スル祖稅ハ前進  
稅法ヲ以テ之レヲ徵收セシトテ開陳セシニアラスヤ(先キノ第  
二節ノ終尾ヲ見ルヘシ)

第四節 前進稅及ヒ歲入稅(前篇第九篇第八章及ヒ續

篇第十章第三節ヲ見ルヘシ)

予輩ハ既ニ前篇第二章ニ於テ前進稅法ハ諸稅ヲレテ悉ク各人  
ノ所有物及ヒ其歲入物ニ賦課スル祖稅ノミニ歸セシメタル簡  
約稅ニ於テハ大ニ適當ナルヘク又歲入稅ニ於テハ資本稅ニ於  
ケルヨリモ之レヲ實行スルト甚ク容易ニシテ且至當ナルヘシ  
ト云フトテ論述シタリ  
予輩ハ又多少前進ノ比例ヲ以テ徵收スル歲入稅ヲ實際施行セ

ル所アルトモ亦々既ニ開陳シタリ  
歳入税ヲ排撃スル論者ハ不正ノ前進税法即チ空限ナクシテ妄  
リニ増加スル前進税ノミニ係ル誹謗ヲシテ亦々此歳入税ニ被  
ラシメシトテ欲シテ歳入税ハ自ラ前進税ニ赴クモノナリト言  
ヘリ  
レオンズトセシ氏言ヘルトアリ曰ク歳入税ハ之レヲ設立スル  
國ニ於テハ大抵前進税トナルニキモノニシテ既ニ實際上ニ於  
テハ皆然リ蓋シ歳入税ヲ徴收スルニ僅少ナル歳入ヲ有スル者  
ニ就テハ之レカ税ヲ免除スレハ即チ既ニ此税ハ前進税トナリ  
タルモノト云ハサル可ラス何トナレハ僅少ナル歳入ヲ有スル  
者ノ税ヲ免除スル氏ハ即チ重大ナル歳入ヲ有スル者ノ税ヲ倍  
重セサルヘカラサル理由ナルヲ以テナリ是ニ由テ之ヲ觀レハ  
歳入税ハ到底前進税トナルヘキモノナリ此ニ於テカ歳入税ノ

不可ナルト明瞭ナリ故ニ之レヲ見テ不可ナルモノト爲サハル  
人ハ則チ盲人タリ又其不可ナルトチ包匿セント欲スル人ハ則  
チ狂人タリト  
然レ氏同氏ノ言フ所ハ實ニ甚タシキニ過クルモノト謂ハサル  
ヘカラス蓋シ前進ノ方法ヲ以テ歳入税ヲ徴收セルト虫氏又尋  
常ノ比例法ヲ以テ之レヲ徴收スルト能ハサルニアラス且ツ同  
氏ハ歳入税ヲ徴收スルニ僅少ナル歳入ヲ有スル者ニ就テハ之  
レカ税ヲ免除スレハ則チ此税ハ既ニ前進税トナリタルモノト  
爲スト虫氏是レ獨リ歳入税ノミニ限ルニアラス總テ直税間税  
ノ何ノ種類ヲ問ハス納税ヲ免サル人アレハ則チ亦々其税ハ  
皆前進税トナリタルモノナリト謂ハサル可ラス今家錢税ヲ以  
テ之レヲ譬ヘシニ僅少ナル家錢ヲ出ス者ニ此税ヲ免ス時ハ則  
チ重大ナル家錢ヲ出ス者ニ於テハ從ツテ此税ヲ重クセサルヘ

カラス然ラハ則チ此税ハ前進税トナルヘシ同氏ハ斯ノ如ク前進税ヲ駁撃スト至氏千八百四十八年ニ於テ家錢税ヲ徵收スルニ前進ノ方法ヲ以テセンコトヲ自ラ開陳セシニアラスヤ抑前進税法ハ歳入税ニ自ラ附屬スルモノト雖氏亦タ必スシモ互ヒニ今離スヘカラサルモノニアラサルナリ故ニブルードン氏前進税法モ亦タ歳入税モ忌嫌スル人ナリハ其祖稅論ト題セル著述中ニ左ノ如ク言ヘリ

論者ヨ前進税法ハ本来歳入税ニ附着セルモノニアラスト云  
スコトヲ記セヨ

第九章

佛英二國ノ古今ノ收稅費前篇第十二篇ヲ參考  
ス下ニ記スヘシ

ジヘセシ氏ノ其著述中ニ言ヘルコトアリ曰ク予ハ理財事務委員長タル「オズ」氏ノ書中ニ於テ千八百十三年佛國當時百三十萬アリハ簿記税及ヒ官有地稅トシテ納稅者ヨリ出タサシムル所ニ億四千萬フランクナルモ其大藏ニ入ル所一億七千万フランクナリ即チ此ニ稅ノ收入費ハ七千万フランクニシテ其四割一分ニ當レリト云フコトヲ看出シタリシ「佛蘭」高名ナル宰相ノ以前ニアツテハ實ニ收稅費ハ百ニ付キ五百ノ比例ナリキ第二世「アンリ」王ノ時代ニ在リテハ納稅者ノ出ス所ハ三千二百万フランクニシテ大藏ニ入ル所ハ僅カニ七百万若クハ八百万フランクニ過キナリシナリ方今英國ニ於テハ收稅費ハ租稅總收入額ノ殆ント五分ノ比例ナリ  
是ニ由テ之ヲ觀レハ千八百十三年以來夫ノ簿記税及ヒ官有地稅ノ收入方法ハ特ニ改良セリト云ハサル可ラス何トナレハ方



今成立セル八十九品ノ内三品ヲ除キ八十六品ニ於テ此二税ノ  
收入費ハ殆ント其收入額ノ五分ニ過キサルヲ以テナリ右ノ  
リ百二付五ハ氏ノ宰相職タラサリシ以前ニ於ケル收税費計算百ノ比例ハ  
フロマント百ノ比例ハ氏ノ書ニ據レハ甚々其實ヲ失フモノ、如シ此書  
ニ於テハ千三百二十年ヨリ五十年ニ至ル三十一年間毎歳ノ總  
收入額ハ十四億五千三百万フランクニシテ真ニ大歳ニ納入セ  
ル金額ハ九億二千七百万フランクト為スル故ナリ其差ハ五億  
二千六百万リールブルニシテ是レ則チ收税費ナリ之レヲ其收入  
額ニ比例セハ即チ五割七分ニ當レリ  
トロス百ノ比例ハ氏ノ言ニ據レハ千七百五十年ヨリ千八百年ニ至ル間  
三千万フランクヲ收入スル為メニ六千万フランクヲ費セリト  
云フ  
然リト雖モ子クケル氏ハ其「アド」ニスラシヨ百ノ比例ハン百ノ比例ハフィ百ノ比例ハナン百ノ比例ハスト百ノ比例ハ題

セル著述中ニ五億五千七百五十万フランクノ歳入額但シ課後  
及チ拘留費捕縛費トシテ犯罪者ヨリ徴收シタルモノ之レニ  
合算セハ五億八千五百万フランクトナル是レ佛國租税ノ總入  
額ナリヲ收入スルノ費用ハ僅カニ五千八百万フランクナリト  
言ハリ即チ其一割一分六厘ニ當ル但シ同氏ハ之レヲ以テ一割  
〇四厘ニ當ルト言ヘリ又「イウセ」トテ「ル」氏ノ計算ニ據レハ  
千八百四十二年ニ於テ總入額十一億三千二百萬フランクヲ收  
入スル為メニ一億三千二百萬フランクヲ費セリ故ニ真ニ大歳  
ニ納入セル金額ハ一十億フランクナリト云フ即チ其收税費ノ  
比例ハ一割三分二厘ナリ但シ同氏ハ之レヲ以テ一割一分六厘  
六ナリト言ヘリ  
斯クノ如ク「子クケル」氏ハ一割六分六厘ノ比例ヲ一割〇四厘ノ  
比例ト言ヒ又「イウセ」トテ「ル」氏ハ一割三分二厘ノ比例ヲ一

割一部六厘六ノ比例ト云フ所以ノモノハ各諸費ヲ除去セサル  
總收入額ニ對シ其比例ヲ計算スルニ由ルナリ然リト雖此諸費  
ヲ除去シタル真ノ收入額ニ對シテ其收入費ノ比例ヲ計算スル  
ハ至當ト云ヘシ右ノイウゼリヌテ此氏言フ所ノ收稅費平均  
ノ比例一割一分六厘六ヲ今一々分鮮セハ則チ左ノ如シ  
直稅ノ收入費ハ三割七分九厘  
簿記稅及ヒ官有地稅ノ收入費ハ四割九分五厘  
印稅ノ收入費ハ二割九分四厘  
山林稅ノ收入費ハ十五割六分二厘  
關稅及ヒ塩稅ノ收入費ハ十三割八分一厘  
酒稅及ヒ火藥稅ノ收入費ハ十六割五分五厘  
烟草稅ノ收入費ハ二十七割三分六厘  
郵便稅ノ收入費ハ五十五割三分二厘

十七百七十五、年英國ニ於テハ既ニ其飲料稅ノ收入費ハ五分五  
厘ニ過キサル比例ニ至リタリ  
右ニ揭示スル子クケル氏ノ算定シタル佛國收稅費ノ比例ニ據  
レハ現今ノ佛國財政ハ千七百八十九年ノ大變革以前ノ財政ニ  
異ヤラサルカ如シ然レ此此比例ハ充分ニ確實ナルモノト信ス  
ルヲ能ハサルナリ  
佛國ノ大藏卿シヤプロール氏ノ千八百三十年三月十五日其國  
王ニ上申セシ年報書ニ據レハ佛英二國ノ千八百二十八年ノ收  
稅費平均比例ハ左ノ如シ  
英國ニ於テハ 六分四厘ニ  
佛國ニ於テハ 一分〇七厘  
予輩ハボシチイウドシヤミラー、氏ノ著述中ニ佛英二國ノ千  
八百五十四年ノ收稅費平均比例ヲ看出シタリ即チ左ノ如シ

英國 = 於テハ 四分九厘八  
佛國 = 於テハ 一割。九

予輩ハ又此著述中ニ於テ右ノ收稅費平均比例ヲ一々分詳セシモノヲ着出シタリ即チ左ノ如シ

千八百五十四年ニ於テ英國ノ收稅費比例

海關稅 六分九厘一

間稅 五分一厘八

印稅 二分七厘七

奢侈品稅 二分八厘三

歲入稅 二分八厘三

右ノ平均 四分九厘八

郵便稅 七割八分七厘七

皇帝親領地ノ稅 三割七分五厘八

千八百五十四年ニ於テ佛國收稅費比例

直稅 真ノ租稅

此比例ハ他ノ年ニ於テハ大抵其半ニ至ル乃チ千八百四

十二年ニ於テハ三分七厘九ニ過キナリキ

簿記稅 四分八厘七

關稅 二割一分三厘二

間稅 一割三分九厘五

右ノ平均 一割。九

政府ノ專賣法ヲ以テ收入スル租稅

烟草稅及火藥稅 二割七分五厘

郵便稅 六割九分八

山林稅 二割八分二厘

藏書

右ノ平均

三割一分七厘五

總平均

一割四分三厘五

第十章

英國ニ於テ舉行シタル海關稅等改革ノ結果(前篇第十一篇第四章及二十篇第三章ヲ參考スヘシ)

予輩ハ既ニ前篇第七篇第三章ニ於テ輕稅ヲ以テハ反ツテ收入額ノ増加スルヲ示ス為メニ稅則改革ノ結果ヲ表出シ又其第二十篇第三章ニ於テ英國ニ舉行シタル理財及貿易上ノ改革ノ事情ヲ陳述シタリ後々此續篇第十九章ニ於テ英國歲入歲出ノ景況ヲ説明スヘシ

今左ニ英國ニテ舉行シタル理財上ノ改革ノ結果ヲ明示セル數

目ヲ掲載セシトス但シ其一ハ該國貿易局ノ千八百五十三年ニ至ル又テノ結果ヲ掲載セル報告書ヨリ拔萃シ一ハ其會議院ノ佛英二國ノ間ニ通商條約アリシ時ニ至ルマテノ報告書ヨリ摘抄セルモノナリ

第一節 千八百四十二年ヨリ千八百五十三年ニ至ル間ニ舉行シタル海關稅等ノ改革

英國ニ於テ海關稅ヲ減少スルヲ曾テ之レヲ課シタル諸物品ニ殆シト一般ニ施行シタリ乃々此物品ノ重要ナルモノ二十六箇ニ就キ著シク其稅額ヲ減少セリ此二十六箇ノ物品中ニハ即チ麥果物、牛酪、乾酪及ヒ製造品ニ至リテハ鑲銅、銅ノ器物、絹布、綿布、麻布、硝子、陶器等アリ其他物品五百箇餘ニ就キ其海關稅ヲ廢止シタリ此五百箇餘ノ物品中ニハ即チ諸種ノ魚類、銅、亜鉛、蘇木、丁列綿樹、絹糸、羊毛等アリ

ロベルベール氏ハ千八百四十二年ヨリ千八百四十六年ニ至ル  
 マテ右ノ改革ヲ举行セシカ其後、シ、ンルニセトル「アベルデー」及  
 「ゲラドスト」又ノ三宰相モ亦タ継イテ之レヲ舉行シタリ乃  
 十毎歳海關稅ノ收入額ハ左ノ如クナリタリ

千八百四十一年	二一、八九八、〇〇〇 磅
千八百四十二年	二一、〇二五、〇〇〇 磅
千八百四十三年	二一、〇三三、〇〇〇 磅
千八百四十四年	二二、五〇四、〇〇〇 磅
千八百四十五年	二〇、一九六、〇〇〇 磅
千八百四十六年	二〇、五六八、〇〇〇 磅
千八百四十七年	二〇、〇二四、〇〇〇 磅
千八百四十八年	二〇、九九九、〇〇〇 磅

千八百四十九年 二〇、六三六、〇〇〇 磅  
 千八百五十年 二〇、四四二、〇〇〇 磅  
 千八百五十一年 二〇、六一五、〇〇〇 磅  
 千八百五十二年 二〇、五五一、〇〇〇 磅  
 千八百五十三年 二〇、九〇二、〇〇〇 磅

租稅ヲ減少スレハ一時其收入額ハ減少スルモ亦タ忽チ増加ス  
 ルノ最モ親易キ適例トナルヘキモノハ即チ火酒稅ナリ此稅  
 ノ收入額左ノ如シ

千八百四十五年	一、二〇八、〇〇〇 磅
千八百四十六年	一、一六五、〇〇〇 磅
千八百五十二年	一、四四三、〇〇〇 磅

歳  
 督

千八百五十三年

一、四〇二、〇〇〇

砂糖税モ亦々同シク其適例トナルヘキモノナリ即チ此税糖密

千八百四十四年

五、二五四、〇〇〇

舊税則ノ成立セル年ナリ

千八百四十五年

三、五八四、〇〇〇

税則ヲ変更シテ税額ヲ減少セシ年ナリ

千八百四十六年

四、六六三、〇〇〇

又更ニ税額ヲ減少セシ年ナリ

千八百四十七年

四、三九九、〇〇〇

千八百四十八年

四、四二三、〇〇〇

此歳ヨリ以下毎歳一樣ニ税額ヲ減少シタリ

千八百四十九年

四、〇七一、〇〇〇

千八百五十一年

四、一七四、〇〇〇

千八百五十二年

四、〇七一、〇〇〇

千八百五十三年

四、〇六六、〇〇〇

間税ノ改革モ亦々同シ結果ヲ現ハシタリ即チ此税ノ收入額ハ

左ノ如シ

千八百四十二年

一、三六七、八〇〇

千八百五十一年

一、四二二、三五〇

右千八百四十二年ヨリ千八百五十一年ニ至ル間ニ於テ税額合

計百四十万。六十磅ヲ減少シタリ今之レヲ一々揭示スルハ左

ノ如シ

千八百四十四年硝子税ヲ

四、五〇〇

減少セシ金額

千八百四十五年又更ニ此

六、二四〇

歳

税ヲ減少セシ金額  
 千八百四十五年糶賣稅ヲ廢止セシヲ以テ間稅ノ收入額  
 中ニ生シタル減額  
 千八百五十年磚稅ヲ廢止セシヲ以テ間稅ノ收入額中ニ生シタル減額  
 一四〇六〇〇  
 二八一〇〇〇  
 四五六〇〇〇

合計  
 一四〇六〇〇  
 關稅ノ收入額ト間稅ノ收入額トヲ合算スレハ即チ左ノ如シ  
 千八百四十二年 三五八四〇〇〇  
 諸雜費ヲ除去シタル真ノ入額ナリ以下皆同シ  
 千八百四十五年 三五七四四〇〇  
 千八百五十三年 三六二四〇〇〇

右千八百四十二年ヨリ千八百五十三年ニ至ル間ニ於テ稅額ノ著シキ減少アリシト雖凡反ツテ千八百五十三年ノ收入額ニ於テハ千八百四十二年ノ收入額ニ對シ若干ノ増額アリ此減稅額ハ即チ千八百四十二年四十四年及ヒ四十四年ニ於テハ百九十五萬磅又次ノ八年間ニ於テハ八百七十五萬磅此中ニハ麥稅ノ減額ヲ算入セスニ及ヒタリ之レヲ合算スレハ則チ一千〇六十五萬磅ニシテ即チ殆ント二億七千萬フランクニ當レリ  
 斯クノ如ク諸稅ノ著シキ減少アルモ間稅關稅ノ收入額増加セシハ即チ此改革ノ結果タリ又大歲ノ不足ノ消滅セシテ輸入稅ヲ減少セシテ直稅殊ニ歲入稅ヲ設立シテ間稅ヲ減少シ以テ貧者ノ負擔スルニ至ルヘキ租稅ヲ輕少ニセシテ亦チ即チ此改革ノ結果タリ蓋シ斯クノ如キ結果ハ唯理財上ニ關スルモノニシテ其他經濟政治及ヒ道德上ニ關スルモノ勝テ數フヘカ

ラガルナリ理財上ノ改革ノ經濟政治及ヒ道德上ニモ亦々其好結果ヲ来タス事ニ就テハ既ニ前篇第二十章第三章ニ之レヲ詳説シタリ

第二節 千八百四十五年ヨリ千八百五十九年ニ至ル間ニ舉行シタル海關稅等ノ改革

今ヤ近時ノ會議院報告書中ヨリ拔萃シタル數目ヲ揭示セントス

海關稅ノ收入額

千八百四十二年ヨリ千八百五十二年ニ至ル間ノ海關稅收入額ニ就テハ前節ヲ見ルヘシ	千八百四十五年	二〇、一〇〇、〇〇〇磅
千八百四十四年	二〇、七〇〇、〇〇〇	
千八百五十五年	二〇、九〇〇、〇〇〇	
千八百五十六年	二二、三〇〇、〇〇〇	
千八百五十七年	二二、二〇〇、〇〇〇	

千八百五十七、八年 二二、〇〇〇、〇〇〇  
 千八百五十九年 二二、七〇〇、〇〇〇  
 右ノ千八百五十九年ノ收入額二千三百七十万磅ハ即チ佛國ノ六億フランクニ殆ニト當レリ而シテ其過半ハ僅カニ左ノ數稅ヨリ生シタリ

千八百五十七年	千八百五十八年	千八百五十九年
砂糖稅 一七五五、〇〇〇	一三九七、〇〇〇	一四九五、〇〇〇
茶稅 一二三、五〇〇	一三四、〇〇〇	一三一、八〇〇
茄菲稅 一三、二〇〇	一一、八〇〇	一〇、六〇〇
穀物及 麵粉稅 一一、一〇〇	一二、一〇〇	一四、五〇〇
火酒稅 六五、七〇〇	五七、五〇〇	五六、九〇〇
葡萄酒稅 五〇、〇〇〇	四三、三〇〇	四四、〇〇〇
烟草稅 一三〇、二〇〇	一三一、八〇〇	一三六、〇〇〇



材木税

一四、八、〇、〇、〇、〇、〇

一四、五、〇、〇、〇、〇、〇

一四、三、〇、〇、〇、〇、〇

此千八百四十五年ヨリ千八百五十九年ニ至ル十五年間ニ於テ  
舉行シタル理財上ノ改革ノ總結果ニ就テ見ルハ一方ニ於テ  
ハ此十五年間ニ廢止セシ税額或ヒハ減少セシ税額ハ三十一百  
万磅即チ七億七千五百万フランクニ至リタリ是レ即チ海  
關税及ヒ間税ニ屬スル諸税ヨリ收入セシ所ノモノナリ但シ其  
一部今ハ直税即チ憲牘税千八百五十一年ニ廢止ス印稅奢侈品  
稅歲入稅ヨリ收入セシ所ノモノナリ他ノ一方ニ於テハ增加セ  
シ税額ハ二千四百万磅即チ六億フランクニ及ヒタリ是レ則チ  
殊ニ歲入稅家屋稅千八百五十一年ニ設立シタリ及ヒ砂糖稅茄  
菲稅火酒稅等ノ如キ海關稅或ハ間稅ノ增加ヨリ生セシ所ノモ  
ノナリ

第三節

歲入稅

前篇第九篇第八章及ヒ續篇第八章第

四節ヲ見ルヘシ

歲入稅ヲ賦課スヘキ歲入ヲ今チテ五種トセリ即チ左ノ如シ

第一種 不動産土地家屋製造所礦山製鍊所演獵場堀河鍊道  
斯瓦製造所等ヨリ生ズル歲入

第二種 借地人及ヒ佃戸ノ歲入

第三種 公債ノ利子及ヒ諸會社ノ配當金ヲ以テ成ル所ノ歲

入

第四種 商業及ヒ工業ノ利益ヲ以テ成ル所ノ歲入

第五種 遺言及ヒ政府ニ關セサル送年金等ヨリ生ズル所ノ

歲入

千八百四十五年ヨリ千八百五十九年ニ至ル此歲入稅ノ收入額  
ハ左ノ如シ

千八百四十五年

五、〇、〇、〇、〇、〇、〇 磅

千八百四十六年	五三〇〇〇〇
千八百四十七年	五四〇〇〇〇
千八百四十八年	五三〇〇〇〇
千八百四十九年	五四〇〇〇〇
千八百五十年	五三〇〇〇〇
千八百五十一年	五三〇〇〇〇
千八百五十二年	五五〇〇〇〇
千八百五十三年	五五〇〇〇〇
千八百五十四年	七四〇〇〇〇
千八百五十五年	一三七〇〇〇
千八百五十六年	一五七〇〇〇
千八百五十七年	一四七〇〇〇
千八百五十八年	七三〇〇〇〇

千八百五十九年

五八〇〇〇〇

右ノ收入額ニ於テ千八百五十四年ヨリ千八百五十七年ニ至ル  
 間ノ著シキ増加アル所以ノモノハ當時ノ軍費ヲ補足スルカ為  
 ニ稅額ヲ重クセシニ由ルナリ  
 千八百五十七年及ヒ五十九年ニ於テハ左ノ如ク此稅  
 額ヲ減少シタリ

百五十磅以上ノ 歲入ニ於テハ	六分四厘	千八百五十七年	二分	千八百五十八年	二分	千八百五十九年	二分
百磅ヨリ百五十磅 ニ至ル歲入ニ於テハ	四分六厘						

第四節 英國ニ於テ舉行シタル郵便稅法ノ改革前篇

第七篇第三章ヲ見ルヘシ

英國ニ於テ「ログラントヒル」氏ヲ勸獎ニ由リテ舉行セシ郵便稅  
 改革ハ即チ亦タ夫ノ租稅ヲ減少スレハ隨テ一時其收入額ハ

減少スト虫氏復々忽チ増加スト云フヲ明証スルモノ一タ  
 手輩ハ今該國驛逆頭ノ年報書中ヨリ此改革ノ結果ヲ披露シテ  
 以テ之ヲ左ニ揭示セントス

年 信書ノ頁數

大藏省ノ收入セシ金額

千八百三十八年

一、六三九、〇〇〇、〇〇〇 磅

千八百三十九年

一、六三三、〇〇〇、〇〇〇

千八百四十年

一、六八七、〇〇〇、〇〇〇

此年ニ於テ八十五「ガ」ニナル郵便稅ヲ平均十「ガ」ニ  
 込即チ一「ペ」ニ減少シタリ

千八百四十一年ヨリ四十  
 五年ニ至ル間ノ平均數

二二七、七〇〇、〇〇〇

六三六、八〇〇

千八百四十六年ヨリ五十  
 年ニ至ル間ノ平均數

三二七、〇〇〇、〇〇〇

八三八、九〇〇

千八百五十二年ヨリ五十  
 五年ニ至ル間ノ平均數

四一〇、一〇〇、〇〇〇

一一二八、五〇〇

千八百五十六年

一、二〇七、七〇〇

千八百五十七年

一、三一四、九〇〇

千八百五十八年

一、一六一、四〇〇

千八百五十九年

一、四〇〇、〇〇〇

此千八百五十九年ニ於テ配達セシ信書ノ頁數ハ斯クノ如ク五  
 億四千五百万箇ナリト雖モ其他新聞紙雜誌ノ如キモノ八千万  
 箇ヲ配達シ且為替証券七百万枚此金額三億「フラン」ナリト述  
 送セリ

右ノ千八百三十九年即チ此改革ノ前年ニ配達セシ信書ハ二  
 百四十万箇ノ内ニ無稅ノモノ六百五十万箇アリキ但シ千八百  
 三十九年ヲ以テ全ク此改革ノ前年ト看做スヲ能ハサルナリ何  
 トナレハ同年十二月五日ヲ以テ大ニ信書ノ郵便稅ヲ減少シ以  
 テ其最大ナルモノヲ四「ペ」ニ減少シテ二十「ガ」ニ餘ト定メシヲ以テ

ナリ其後千八百四十年一月十日ヲ以テ又郵便税法ヲ改革シ以テ信書ノ郵便税ハ遠近ヲ問ハズ總テ一樣ニ一ペニ即チ十

ハニチ一山ト定メタリ

第十一章

佛國ニ於テ奉行シタル関稅等ノ改革(前篇第二十篇第四章ヲ参考スヘシ)

千七百九十一年ニ於テ自由貿易ノ論議ニ基キ且「フジオクラー」ト云フ一派ノ經濟家ノ著述ニ從ツテ関稅法ヲ改革シ以テ其稅額ヲ減少セシモ其後或ハ復讐ノ旨趣ヲ以テシ或ハ所謂保護稅法ノ謬說ニ據リテ復々漸ク之レヲ増加シタリ然レモ千八百五十三年ニ至リテ少シク其稅額ヲ減少セリ是レ蓋シ千八百六十年及七、六十一年ニ於テ奉行セシ改革ノ初步ト謂フヘキナリ千八百五十三年即チ「ベルシギ」氏ノ宰相タリシ時ニ於テ實ニ穀物稅ノ差等アル稅則ヲ廢止シ家畜稅ヲ著シク減少シ(牛一頭ニ付五十五「フランク」ノ稅ヲ三「フランク」三十「サンチム」ニ減シ

タリ) 鑛鉄板、鋼鉄及ヒ石炭ノ税モ亦タ著シク減少シタリ  
千八百六十年一月十五日「モニドゥルト云フ新聞紙」ニ於テ國帝  
第三世拿破侖ノ其宰相ニ送リタル関税法ヲ改革シ以テ商業上  
ノ政略ヲ一新セシカ為メノ計畫ヲ示スノ宸翰ヲ掲載セリ其計  
畫ハ即チ左ノ如シ

羊毛及ヒ綿花ノ税ヲ廢止スル

砂糖及ヒ茄菲ノ税ヲ漸次ニ減少スル

輸入品ノ禁ヲ解ク

外國ト通商條約ヲ解<sup>締結</sup>スル

第三世拿破侖ハ人ヲシテ此計畫ニ就テ過慮スルヲナカラシム  
ル為メ又関税法等ノ改革ヨリ生スル農工商ノ勉勵ヲ益ク保助  
スルノ旨趣ヲ以テ宸翰中ニマタ左ノ教示ヲ追加セラレタリ  
『道路改良ノ事業ハ斷然之レヲ盛行スヘシ』

『堀河ノ税ヲ低下シテ以テ運送費ヲ減少スヘシ』

『農ニ工ニ貸與スヘシ』

此宸翰中ノ最モ重要ナル所ハ即チ輸入ヲ禁遏スルカ如キ野蠻  
ノ方法ヲ廢止セシト外國ト通商條約ヲ締結セシトニアリ  
抑々外國ト通商條約ヲ締結セントスルハ即チ漸次保護税ヲ減  
少シ而シテ自由貿易ノ道ヲ開カントスルニアリ何トナレハ自  
由貿易ノ道ヲ開カスシテ通商條約ヲ締結スルヲ能ハサルモノ  
ナレハナリ是ヲ以テ宸翰中通商條約ヲ締結セントスル條件  
ハ當時大抵自由貿易ヲ善シトスルノ說トナリタル一般ノ人民  
ヲシテ大ニ感動セシメタリ但シ是レヨリ先キノ衆論ハ種々ノ  
謬說ノ為メニ保護税ヲ可トスルヲニ歸シタリキ  
他ノ條件ニ至リテ亦タ國益ト理財上ノ為メニハ實ニ急務ノ  
事ト雖モ右ノ條件ニ比較スレハ則チ第二等ノ急務ト謂ハサル

大藏省

ヘカラス蓋シ羊毛ノ稅ヲ廢止スル事ハ曾テ屢ク其稅ノ減額アリシヲ以テ此一事ハ既ニ舉行セシモノ、如ク又綿花ノ稅ヲ廢止シ砂糖、茄菲並ニ堀河ノ稅ヲ減少スル事ハ唯少シク大蔵ノ困苦ヲ來タスノミ又通路ノ便ヲ開ク事ハ會社ヲシテ之レヲ舉行セシメハ決シテ難キトナカルヘキナリ其他政府ノ農工ニ扶助金ヲ貸與スルヲ及ビ政府ハ屢々無益ニ財本ヲ支消スルモノナリニテ公業ヲ起ス事ハ殊ニ佛國ニ於テハ一般ニ人民ノ甚々希望スル所ニシテ之レニ抵抗スル者ハ獨リ物ノ真理ヲ熟知セル經濟家ノミナリ

右ノ計畫ノ如ク其後羊毛綿花ノ稅ヲ廢止シ(但シ佛國船ニテ輸入ナル羊毛綿花ニ限ル)併セテ布打淡硝石護謨藍靛呀嚨典アムニルノ如キ他ノ原品ノ稅モ亦之レヲ廢止セタリ(千八百六十年五月五日ノ法令ニ係ル)其他尚ホ獸皮獸脂油種樹膠カウチルクキョウタベル

カ樹膠ノ香水、麻、無名ノ麻類、苗、諸種ノ鑛物、骨等ノ稅ヲ廢止シ(千八百六十一年一月五日ノ法令ニ係ル)砂糖、茄菲、及ビ椰子實ノ稅則ヲ改更シ而シテ其稅額ヲ殆ント五割減少シ(千八百六十一年五月二十三日ノ法令ニ係ル)但シ此法令ハ其翌日ヨリ實行スヘキモノトセシナリ(外國砂糖ノ陪稅ヲ廢止シ(千八百六十年一月十六日ノ法令ニ係ル)通河船稅ヲ廢止シ(千八百六十年三月二十二日ノ法令ニ係ル)堀河ノ通行稅ヲ依下シ以テ諸工業ニ必要ナル原品ノ運送費ヲ減少セシカ為メニ政府ニテ堀河ヲ買收ルヲ確定シ(同年七月二十八日及ビ八月一日ノ法令ニ係ル)新鐵道ノ開設ヲ許可シ、邑道ノ改良、濕地ノ放水、不耕地ノ耕耘、用木ノ植付等ノ為メニ三千萬フランニテ供シ(千八百六十一年)當機等ヲ改良スル為メニ製造者ニ下付スル四千萬フランニテ、貸與金ヲ備ヘ置キ(千八百六十一年八月一日ノ法令ニ係ル)英國ト通商條

約ヲ締盟スルヲ決定シタリ(千八百六十年一月二十三日)此條約ハ其後白耳義等ノ諸國トモ亦之レヲ締盟セリ其他千八百五十九年ノ始メニ於テ設立シタル租税ハ悉皆之レヲ廢止シ以テ百キロクラムニ就テハ五十サンチム一エクトリートルニ就テハ四十サンチムト云フ一ツノ定税ヲ設立シタリ  
英國トノ通商條約ノ著大ナル結果ハ佛國ニ於テハ外國輸入品ノ禁ヲ解キ且英國製造品ノ車入税ヲ著シク減少セリト英國ニ在テハ佛國製造ノ葡萄酒及ビ火酒ノ輸入税ヲ著シク減少シ且其他ノ諸物産ノ輸入税ヲ廢止セリトニアリ是故ニ兩國ノ誤解論者ハ此條約ヲ鼓動セシ兩國ノ人ヲ以テ一ハ佛國ノ利ヲ損ト一ハ英國ノ益ヲ害セシ者ト看做シテ大ニ之レヲ誹謗シタリ  
佛國ニ於テハ斯ノ如キ條約ノ裁決ハ千八百五十二年ノ國憲ニ

テ擴張シタル國主ノ權限内ニアリト雖氏英國ニアリテハ國主ノ權限内ニアラサルヲ以テ乃チ會議院ニ附セシニ甚タ烈ニキキ討論アリテ終ニ之レヲ許容シタリ(千八百六十年五月)  
此通商條約ハ漸次他ノ諸國ト之レヲ締盟スルニ隨ツテ愈々充分ナルニ至ルヘシ既ニ他ノ二國ト之レヲ締盟セリ即チ白耳義伊太里是レナリ白耳義トノ條約ハ千八百六十一年五月一日ヲ以テ之レヲ締盟シ而シテ同年十月一日ヨリ之レヲ奉行シタリ又ゾルウベレ<sup>ン</sup>ニ<sup>シ</sup>關稅<sup>一</sup>樣<sup>ニ</sup>スル<sup>ト</sup>ヲ<sup>盟</sup>約<sup>ト</sup>ノ<sup>條</sup>約<sup>ハ</sup>予<sup>輩</sup>カ<sup>此</sup>書<sup>ヲ</sup>編<sup>ス</sup>ル<sup>時</sup>ニ<sup>アリ</sup>テ<sup>猶</sup>憶<sup>議</sup>中<sup>ナ</sup>リ<sup>是</sup>レ<sup>蓋</sup>シ<sup>歐</sup>洲<sup>ノ</sup>商<sup>業</sup>上<sup>ニ</sup>關<sup>ス</sup>ル<sup>政</sup>務<sup>ノ</sup>一<sup>大</sup>革<sup>命</sup>ト<sup>謂</sup>ハ<sup>サ</sup>ル<sup>ヘ</sup>カ<sup>ラ</sup>ス<sup>(</sup>真<sup>ノ</sup>自<sup>由</sup>貿<sup>易</sup>ニ<sup>達</sup>ス<sup>ル</sup>ニ<sup>ハ</sup>尚<sup>甚</sup>タ<sup>遠</sup>シ<sup>ト</sup>雖<sup>氏</sup>又<sup>此</sup>條<sup>約</sup>ヲ<sup>稱</sup>讚<sup>ス</sup>ル<sup>人</sup>或<sup>ハ</sup>誹<sup>謗</sup>ス<sup>ル</sup>人<sup>ハ</sup>何<sup>ノ</sup>言<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>ス<sup>ルト</sup>雖<sup>氏</sup>實<sup>ニ</sup>輸<sup>入</sup>ノ<sup>禁</sup>制<sup>廢</sup>シ<sup>テ</sup>一<sup>割</sup>五分<sup>二</sup>割<sup>五</sup>分<sup>等</sup>ノ<sup>稅</sup>ト<sup>ナ</sup>リ<sup>タ</sup>リ<sup>此</sup>條<sup>約</sup>ノ<sup>政</sup>治<sup>及</sup>ビ<sup>道</sup>德<sup>上</sup>

此條約ハ政治及經濟上ノ結果モ亦甚大ナルヘシ蓋シ此條約ハ歐洲ノ平和ヲ堅牢ニシ且戰爭ノ發スルコトアルモ必ズ忽チ平和ニ歸スルコトヲ助成スルニ至ルヘキヲ以テナリ又其經濟上ノ結果ハ平和ノ時ヲ論セズ總令擾亂ノ時ト雖モ亦著大ナルヘシ予輩ハ理論ト實驗トニヨリテ此言ノ虚ナクサルヲ保証ス然レトモ若シ諸業ノキニ困難ノ發生スルハ人多クハ此困難ヲ胚胎セシモノハ即チ此條約ニアリト訴フルニ至ルヘシ譬ハ英國ニ於テ過度ニ鐵道ヲ開設セシト佛國等ノ擾亂ノ影響ト農業物産ノ價值ヲ低下セシ豐作トニ因リテ發生シタル困難ヲ千八百四十六年ニ舉行シタル其理財上ノ改革ノ所為ナリトシテ大ニ此改革ヲ誹セシト一轍ニ歸スヘシ

又其理財上ノ結果ハ其後平和ノ能ク持續スルニ於テハ數年ヲ出テスレテ判然タルヘシ假令ハ此條約ニ從ワテ舉行シタル廢稅或ハ減稅ヨリ生スル歲入ノ不足ヲ九千方フランニ看做スモ曾テ輸入ヲ禁止シタル物産ノ輸入ニ就テ徵收スル租稅ニ因リ或ハ右ノ廢稅減稅ノ為メニ層輸入ノ増殖スルニ因リ或ハ此輸入増殖ノ為メニ物産製造額及ヒ其賣買額モ亦タ隨テ増殖スルヲ以テ自ラ諸稅ノ收入額モ亦タ均シク倍重スルニ因リテ忽チ此不足ヲ補充スルニ至ルノミナラス尚著シク歲入ヲ餘スニ至ルヘシ

然レモ斯ノ如キ形勢ニ至ルマテハ佛國大藏省ハ英國大藏省カ歲入稅ヲ擅ニ設立シテ以テ右ノ不足ヲ補充スルカ如キ權ヲ有セサルカ故ニ既ニ成立セル或ル稅ノ稅額ヲ增加シテ以テ此暫時ノ不足ヲ補充セシトテ欲シタリ是ニ因テ烟草佛國政府ノ專價ヲ貴クシテ一キログラムニ就キハフランクニシテ十フランニシト為シ又千八百六十一年ニ於テ火酒稅ヲ增加シテ賣價

此條約  
大藏省



五割ト為シタリ然リ而シテ此稅額增加ハ舊ニ該品ノ支消額ト  
大蔵ノ收入額トヲ減少スルノマホラス尚農家ニ大害ヲ與フル  
トナシト云フヘカラサルモノナリ

蓋シ此英國トノ通商條約ハ千八百年代ニ施行セシ處置ノ中ニ  
テ最モ有益ナルモノ、**十**タリ抑ク此條約ハ諸經濟家ノ預メ水  
ニ之レヲ勸獎セシニ因リ佛國ニテ之レカ草案ヲ起セシモノニ  
シテ之レカ為メ佛英ノ西政府及ビ之レヲ翼贊セシ顯官并ニ其  
論斷考量校正ニ大ニ盡カセシ人ノ名譽ヲ蒙ムル有實ニ鮮少ナ  
ラサルベシ今左ニ其人各ヲ示サンニ佛國ニ於テハ「ミヤル」**シウ**  
「バリエ」**ル」**氏「ル」**エ」**氏（商務局長）「フール」**ド」**氏及ビ「パロ」**ー」**氏  
（參議院長）英國ニ於テハ「ゴブ」**デ」**氏（自由貿易黨ノ高名ナル首領）  
「グラ」**ド」**氏「スト」**ー」**氏（大蔵卿）「ブ」**リ」**氏「グ」**ト」**氏（會議院ノ議員ニシテ  
談議院及ビ其他ノ集會ニ於テ此條約ヲ保庇セシ人ナリ）即チ是

レナリ  
百六十二  
百六十三  
百六十四  
百六十五  
百六十六  
百六十七  
百六十八  
百六十九  
百七十

第十二章  
白耳義ニ於テ入府稅ヲ廢止セシ事（前篇第十一篇第  
五章及ビ第二十篇第四章ヲ參考スヘシ）

白耳義ニ於テ入府稅ヲ廢止セシ事モ亦タ近時歐洲諸國ニテ拳  
行シタル理財上ノ改革ノ一ト為サバルヘカラス  
抑ク白耳義ニ於テ入府稅ヲ廢止スルノ論ハ數年前ヨリ漸ク熾  
シニシテ既ニ千八百四十五年該政府ハ其年報書中ニ此稅ノ弊  
害ヲ論述セリ其後輿論ノ漸ク此廢止論ニ赴キシヲ以テ千八百  
四十七年十一月該政府ハ一委員ヲ命シテ此稅ノ廢止ヲ論究セ  
シメタリシニ該委員ハ即チ之レヲ廢止スルヲ論定シテ邑費  
ニ充ツヘキ財本ヲ得ル為メノ種々ノ手段ヲ開陳シタリハ費稅  
ヲ補フ為メニ設立シタルモノナレハ之レヲ廢止スレハ則チ  
レニ代ユルノ財本ヲ得ルノ方策ヲ設ケサレヘカラス

此  
此

其後千八百五十六年又之レテ衆議院ニ附シテ其可否ヲ論定セ  
シメシニ遂ニ入府税ヲ廢止スルハ獨リ賤民ノ爲メノミナ  
ラズ諸邑ノ爲メニモ亦甚タ希望スヘキナリト論定シタリ  
然レ氏同年関税法改革ノ事ニ就テ其首府アレクゼールニ開設  
シタル國會ニ於テハ酷シク之レヲ排撃セリ其後千八百五十八  
年「アラバシ」ノ品會ニ於テハ入府税廢止ノ事ニ関セル建言ヲ  
採用シ而シテ之レヲ下議院ニ進呈セシニ下議院ニ於テハ亦タ  
之レヲ大蔵卿「フレール」バルバン氏ニ廻送セリ乃チ同氏ハ此建  
言ヲ可トシ而シテ此税ノ收入額ニ相當スル財本ヲ此税ノ成立  
セル諸邑ニ得セシムルノ方法ヲ開陳シタリ今尤ニ掲クル所ノ  
方法ハ即チ此方法ニ準據セシモノナリ  
千八百五十九年ニアリテハ該國二千五百〇八邑全國ヲ分チテ  
郡邑トナス  
其人口總計四百六十二万三千人ノ内唯七十八邑其人口總計百

二十三万三千人ノミ入府税ヲ徵收シ其收入額總計殆ト一千  
一百万「フレンク」ナリキ  
然ルニ今此税ヲ廢止スレハ則チ此七十八邑ニ一千一百万「フ  
レンク」ノ不足ヲ生スルヲ以テ該國政府ハ此金額ヲ大蔵ヨリ邑廳  
ニ下付シ而シテ郵便税関税及ヒ間税ノ收入額ノ幾分ヲ此金額  
ニ當テント思考セリ  
然リト雖モ此郵便税等ハ曾テ入府税ノ設立セサル諸邑ヨリモ  
亦タ同シク之レヲ出タスモノナルカ故ニ曾テ入府税ノ設立セ  
ル諸邑ニ其收入額ノ幾分ヲ附與スルハ甚タ不公平ノ事ナリ是  
故ニ該政府ハ入府税ノ廢止ニヨリテ他ノ諸税ノ收入額自ラ増  
加スヘキヲ以テ此増額ノ幾分ヲ曾テ入府税ヲ設立セサル諸邑  
ニ返還セント思考シタリ  
右ノ方法ハ衆議院ニ於テ人民ノ代議者之レヲ許諾セリ乃チ千

八百六十一年七月十八日ノ法令第一條ヲ以テ入府税ヲ廢スル  
ルヲ公告シ第二條ヲ以テ郵便税收入額ノ百分ノ四十、茄菲  
輸入税收入額ノ百分ノ七十五、葡萄酒、火酒、酢ニ課スル租税收入  
額ノ百分ノ三十四ヲ曾テ入府税ヲ設立セル諸邑ニ下付スル金  
額ニ當ツルヲ確立シタリ  
斯ノ如ク入府税ヲ廢止スルハ則チ間税ノ收入額自ラ増加スヘ  
キヲ以テ此増額ハ殆ント千四五万フランクニ至ルヘシト預定  
シ而シテ其内八百万乃至九百万フランクヲ以テ入府税廢止ヨ  
リ生スル不足ヲ補充シ且其餘ヲ以テ曾テ入府税ヲ設立セサル  
諸邑ニ附與セント思考セシモノナリ  
白耳義ノ經濟家ハ此方法ヲ以テ諸邑ノ會計ト大政府ノ會計ト  
ヲ混同スルモノト為シ又曾テ入府税ヲ設立セサリシ諸邑ニ就  
テハ不公平ヲ來タスモノト為シ又將來ニ奉行スヘキ郵便税法

ノ改革ヲ妨害スルモノト為シ又間税ヲ重クスルノ原因トナ  
ルモノト為シテ大ニ之レヲ誹謗シタリ斯ノ如ク之レヲ誹謗ス  
ル手蓋シ其理ナキニアラサルナリ  
然リト雖此改革ハ之レヲ概論スレハ則チ害ノ最モ大ナル租  
税ヲ廢止シテ害ノ稍ク小ナルモノヲシテ之レニ代テシムルモ  
ノト云ハサルヘカラス  
斯ノ如ク入府税ヲ廢止スルハ佛國ニテ千八百五十九年六月  
十九日ノ法令ヲ以テ設立シタル擴境法ヨリ寧口之ヲ採用スヘ  
キナリ此擴境法ニヨリテ巴理府ノ境內ヲ堡砦ノ場所マテ擴充  
シタリ  
予輩ハ今此章ヲ結ハントスルニ方リ讀者ヲシテ留心セシムヘ  
キナリ英國ニ於テハ未タ曾テ入府税ヲ設立セシレナシト云フ  
是レナリ

第十三章

貨幣ノ変更(前篇第十五篇第一章ヲ見セシ) 昔時貨幣ノ変更貨幣ヲ改造シテ其品ハ理財上ノ一寸畧トシテ 欠シク之レヲ施行セリ是レ蓋シ政府ハ擅ニ貨幣ノ價值ヲ増加スルヲ得ヘシト確信セシニ由ルナリ之レヲ重言スレハ則チ貨幣ノ品位ヲ下タスモ尚ホ之レヲ以テ従前ニ均シキ数量ノ物品ト交換スヘシト命令スルヲ得ヘシト思想セシヲ以テナリ政府ハ斯ノ如キ思考ニ據リテ貨幣ノ量ヲ減少シ而シテ尚ホ之レヲ以テ従前ニ均シキ價值アルモノトシテ通用スヘシト命令シ或ハ其量ヲ増加スルヲナクシテ従前ヨリモ其價值ヲ貴クシテ通用スヘシト命令シタリ然リト雖氏斯ノ如キ際ニ當リテ何事ノ發生スルモノナルヤ今左ニ其通例ヲ挙テ之レヲ証明セン 在昔佛國王第一世ビロップ(千百〇八年ニ死ス)ハ「シャルマーキ

王(八百十四年ニ死ス)ノ製造セシ量十二「オンス」ノ銀質「リール」ヲ改造シテ之レニ夾雜金三分一ヲ加ヘ即チ銀八「オンス」夾雜金四「オンス」ト為シ而シテ尚ホ之レヲ同シク「リール」ノ名ヲ以テ通用セシメタリ此ニ於テカ忽チ此新「リール」ヲ以テ得ル所ノモトハ曾テ舊「リール」ヲ以テ得ル所ノモノニ三分ノ二ニ過キサルニ至リタリ又是レカ為メニ政府ノ債主及ヒ各人ノ債主カ其負債主ヨリ領收スル所ハ始メ彼レニ貸與セシ金額ノ恰モ三分ノ二ニ過キサルカ如シ是レ則チ實ニ一部分ノ「バンク」ル「ト」トシテ負債主ノ其負債一部分ト謂ハサル可クハ「リール」ノ價格ヲ示シタル表アリト雖氏予輩ハ今茲ニ之レヲ掲クルヲ要セス其中ニ就テ「リール」ト「ル」ノ「ア」製造セシ「リール」ト云ノ價值ハ「一フランク」(純銀ノ量四「グラム」)アリノ價值ヨリモ尚ホ少シク下タレリ然ルニ「シャルマーキ」王時代ノ「リール」

大蔵省

ルハ殆ント八十「フラング」ノ價值アリト云フ「ト示スヲ以テ足  
レリトス斯ノ如ク「リ」ブルノ品位ヲ下シテ遂ニ「フランク」ニ  
足ラサルモノト為セシト雖氏又其間ニ時宜ニヨリ國王債主ト  
ナリタルキニ於テハ始メ其貸與セシ金額ヨリ多ク收入スル為  
メ且斯ノ如ク貨幣ノ品位ヲ下ストヨリ生スル人民ノ憤氣ヲ避  
クル為メニ其品位ヲ増加シテ「フォルト」モ子「強キ品位ノ貨ト名  
クルモノヲ屢ク製造セシ「トアリ此品位増加ハ永久ニ成立スル  
租税ヲ設立セシ時ト同時ニ始マリシト云フ  
往昔ノ政府ハ不當ノ財本ヲ得ル為メニ屢ク右ノ如キ奸計ヲ行  
ヒシト雖氏人民ハ政府ノ公告スル貨幣ノ「虚價」ヲシテ忽チ其真  
價ヲ下クラレメタリ故ニ政府ハ縱令權カヲ以テ其下落ヲ防止  
セントレ又造幣官ヲシテ其職工ト衆人トヲ欺クノ方法ヲ以テ  
之レヲ製造セシメ以テ密カニ其本位ト量目トヲ弱クセン「ト

務ムルト雖氏曾テ其目的ヲ達セシ「トナカリキ千三百三十年佛  
國王「ヒリッ」アドウバロア「ハ其造幣官ニ送リタル命令書ヲ以テ彼  
等ニ貨幣變更ノ秘密ヲ他ニ漏サ、ラン「トテ經文ノ上ニテ誓約  
セン「トテ命シ而シテ尚ホ彼等ニ言フテ曰「及善ノ方法ヲ以テ  
高價ニ貨幣ノ價值ヲ示シ以テ彼等ヲシテ其分量ニ變更アリレ  
「トヲ覺知セサラシメヨト此般ノ如キ命令書ノ規令ニ存セルモ  
ノ尚ホ多シ蓋シ此ハ當時種々ノ惡風ノ大ニ行ハレシト云フ「ト  
ヲ証スルニ足レリ  
右ニ述ル所ハ佛國ノ事ニ係レリ然レ他諸國ノ古代且ツ近世  
ノ「曆史ヲ見ルニ亦ク其例尠シトセス故ニ今諸國ノ貨幣變更ニ  
関セル事ヲ詳説センハ更ニ一大書冊ヲ要スヘシ  
一日「ストル」ク「民」ノ語リシ「トアリ曰ク「千六百五十五年魯西亞帝  
アレクシ」ハ銀貨ヲ銅貨ニ代ユル「トテ工夫シテ銀貨「トベ」ク

ト同形ノ銅貨「ゴベーク」ヲ鑄造セシメ而シテ銀貨「ゴベーク」ト稱  
ヲ以テ之レヲ授受スヘシト命令セリ其大藏ニ於テモ亦タ銀貨  
「ゴベーク」ト同價ヲ以テ之レヲ領收シ且其發行額モ夥多ナラサ  
リシヲ以テ千六百五十八年ニ至ルマテ尚銀貨「ゴベーク」ト均シ  
キ價值ヲ保有セリ然レモ此年ヨリ漸ク下落シテ千六百六十  
年ニ至リテハ既ニ銀貨「ゴベーク」ノ半價ニ及ビ又千六百六十  
年ニ至リテハ其百分ノ四ト成リタリ是レカ為ノ「モスク」ニ  
於テ人民大ニ沸騰シ遂ニ魯帝ハ此廢金ヲ廢止セザルヲ得サル  
ニ至リタリト

夫レ貨幣變更ノ事ニ就キ畢竟ジベセ「氏」(譯)經濟家ノ中ニテ最  
モ明瞭ニ此事ヲ論究セシ人ナリノ言ノ如ク論決セサルヘカラ  
ス其言ニ曰ク「抑ク貨幣ノ變更ハ真誠ノ「バンク」トシテ物  
價ノ昂低ヲ生セシメ有益ノ「投機」ヲ誤マラシメ加之貸借スルカ

為メ信々全ク湮滅セシムルモノナリ蓋シ人其財本ヲ貸シテ  
後テ之レヲ繳收スル時ニ方リ其額減少スルノ恐レアル時機ニ  
於テハ之レヲ貸ス者ナカルベク又人他ノ財本ヲ借リテ後テ之  
レヲ還償スル時ニ方リ其増加スルノ患ヒアル時機ニ於テハ之  
レヲ借ル者ナカルヘキヲ以テナリ嘗テ屢ク貨幣變更ノ後ニ  
來リタル重税モ亦均シク生財事業ニ著シキ妨害ヲ與フルモ  
ノナリト

又貨幣變更ノ一般ノ道德ヲ亂タスヲ慚シトセス後令ハ是カ為  
メ奸人ハ總テ經紀上ニ於テ善人ニ對シテ不當ノ利ヲ占メ而シ  
テ遂ニ此ニ乘シテ人民ハ盜賊ノ所業ヲ行ヒ政府ハ強奪ヲ為  
スニ至ルヘシト云  
近時尚ト土耳其、澳地利(倫巴爾、維尼西ニテ)那不勒ニ於テ此貨幣  
變更ヲ行ヒシト云

鐵道

第一節 証券及紙幣

夫レ紙幣ヲ發行スル事ハ理財上ノ一方畧トシテ古今屢ク之レヲ施行セリ

予輩ハ經濟論ト題セル書中(第十八篇第三百四十八丁)ニ紙幣ト証券トノ區別ヲ為シタリ今復ク茲ニ之レヲ説明セン即チ証券トハ各人又ハ銀行ヨリ發行スルモノニシテ且貨幣流通ノ要用ノ一部分ヲ補充スルモノヲ云ヒ紙幣トハ政府ヨリ其會計上ノ困難ナル時ニ於テ發行スルモノ或ハ政府ノ為メニ銀行ヨリ發行スルモノニシテ其估價ハ右ノ証券ヨリモ稍ク下ルモノヲ云フ

抑ク紙幣タルモノハ第一政府ニテ強テ之レヲ融通セシムルモ

ノナリ第二共發行額ノ其流通ノ要用額ヲ超過スルモノナリ第三只假定ノ價格ヲ現ハスノモノモノナリ又政府ニテ抵當品ヲ以テ充分ニ之レヲ保証セサルモノナリ否ラサルモ容易ニ賣買スヘカラサル財産ヲ以テ之レカ抵當ト為スモノナリ

凡ク紙幣ハ大抵多少下落セサルモノナレ然リ而シテ此下落ヲ以テ政府ノ經久且漸次ノ強奪ト看做スコトヲ得ハシ且政府ハ一回此道ニ入レハマタ容易ニ此ヨリ出ルコト能ハサルモノナリ之レヲ詳言スレハ則チ一回之レヲ發行セシ後ハ容易ニ之レヲ還償スルコト能ハサルモノナリ是ニ由テ之レヲ觀レハ紙幣發行ハ實ニ危害アル所業ト云ハサル可ラス

支那ニ於テハ既ニ千三百年代ノ末ニ其王カブライ(高名ナルチンヒスカン)ノ孫ハ紙幣ヲ發行シ且其從弟カイカウ(百耳社)ニテ一地ヲ統轄シタリ

紙幣發行シタリト云フ

近世ニ至リテハ諸國概テ皆之レヲ發行セリ其最モ若シキ發行  
ハ佛國ニ於テハ千七百年代ノ始ト末トニアリ英國ニ於テハ同  
シク千七百年代ノ末ニアリ予輩ハ今古ニ此ニ大發行ノ各クニ  
就テ少シク開陳セントス

第二節 ラーヴ銀行ノ紙幣發行(千七百〇六年ヨリ千七百一  
十年ニ至ル)

ラーヴ氏(千六百七十一年蘇格蘭ノ以丁堡ニ生レ千七百二十九  
年威尼斯ニ死セリ同氏ハ一銀行主ノ子ニシテ常ニ心ヲ投機ニ  
傾ケ而メ一銀行ヲ設立シテ紙幣ヲ發行セシメテ謀リ蘇格蘭ノ  
會議院英國政府及ビ政羅巴ノ其他ノ諸政府ニ建議セシモ其志  
ヲ達スルコトヲ得ス又千六百九十五年ニ設立シタル蘇格蘭銀行  
ノ瓦解セントスルヲ挽回セント孜々トシテ力ヲ盡セシト雖モ  
終ニ之レヲ保存スルコト能ハザリキ其後千六百九十四年ウリヤ

ム、パテルソン氏ハ英國銀行ヲ設立シタリハ第十四世路易死後  
千七百十五年ノ末佛國ニ來リテ第十五世路易ノ幼穉ノ間其攝  
政タルオルレアン侯ニ右ノ謀策ヲ建白セシニ甚ク嘉納セラレ  
シヲ以テ竟ニ千七百十六年五月二日ニ株金之レヲ返付スルニ  
ハ其四分一ハ貨幣ヲ以テシ四分ノ三ハ証券ヲ以テスヘキモノ  
ナリヲ以テスル一銀行ヲ創立スルコトノ許可ヲ得タリ抑ク此銀  
行ハ殆ント方今成立セル所ノ銀行ノ如クニシテ尚ホ商業上ノ  
証券ニ就テ課別貸付施行シ各人ノ預ケ金ヲ領收シ挪移金ヲ交  
付スルヲ以テ當時ニアリテハ最モ著シキモノナリ該銀行ヨリ  
發行スル証券ハ世人ノ大ニ信スル所トナリテ遂ニ該銀行ハ  
若シ政府ニ屬スルコトナク獨立ノ形情ニテ持續スレハ日ニ月ニ  
隆盛ニ赴クヘク又商業上ニ大ニナル便益ヲ興フヘシト人皆信  
スルカ如キニ至リタリ然リト雖モ該銀行ハ其經驗既ニ了リタ

大  
鐵  
管



ル時ニ際シ忽チ政府ニ之レヲ合併シタリ乃チ千七百十七年四月十日ノ法令ヲ以テ收税官ニ該銀行証券ノ交換ヲ請求スル者アレハ直チニ之レヲ交換スルニ命令シ且其翌年十二月四日ヲ以テ該銀行ヲ王國銀行ト改稱シタリ其後直チニ六百フランク以上ノ經紀ニ於テハ必ス銀行証券ヲ用ヒサルヘカラサルトナリタリ  
ラード氏ハ種々ノ大事業ニ從事セントラ政府ニ建言シ次イテ千七百十七年八月該銀行ニ西邦會社ト名クル大商社ヲ合併スルノ許可ヲ得タリ此會社ハ千七百十八年九月四日ニ烟草ノ請負ヲ得又千七百十九年七月二十日ニ貨幣鑄造ノヲ委託セラレ又是ヨリ先キ同年五月印度會社ノ名跡ヲ以テ支那塞内牙西印度ノ諸會社ノ舉行セル商業ヲ行ヒ其占有セル特權モ亦ク之レヲ得ルニ至リタリ

是ニ於テカ該會社ハ其証券ノ外ニ尚チ株券ヲ發行セサルヲ得サルニ至リ乃チ之レヲ發行セシニ其負數ハ始ノ二十万ナリレモ千七百十九年五月ニ於テ之レニ五万ヲ加ヘ又其翌年七月ニ於テハ更ニ復タ五万ヲ増シタリ然レモ此負數ハ後チニ増加セシ員數ニ比スレハ甚タ僅少ノモノナリ即チ是ヨリ二三ヶ月ヲ經テ該會社ハ烟草貨幣ノ如キ請負ヲ得且政府ニ十五億フランクノ貸與金ヲ約束セシ時ニ方リ復タ更ニ大ニ其株券ヲ發行セシヲ以テ其負數ハ總計六十二万四千箇ニ至リタリ  
當時人皆妄リニ此株券ヲ渴望セシヲ以テ其價非常ニ騰貴シ即チ五百フランクノ株券ハ一万八千フランクニ及ヒタリ是時佛國人民ハ其富一百億フランクノ増殖セリト妄言シタリ斯ノ如ク其價ノ倍々騰貴スル間タハ實ニ人皆望外ノ財産ヲ得且其之ヲ得ルヤ極メテ速カナルヲ以テ貨幣ハ政府民間共ニ充滿シ奢

大  
鐵  
箱

侈ハ漸ク増長シ而レテ人民一般ニ鼓腹セリ  
該會社ノ發行セル株券ノ員數ハ斯ノ如ク夥多ナルニ又彼ノ銀  
行ノ發行セル証券ノ金額ハ法令ヲ以テ許可セル金額ニ據レハ  
則チ千二百万フランク(當時佛國ニ存在セル貨幣ノ總額ト殆ン  
ト均シキ金額ナリ)ニ過クハカラサルモノト雖モ政府ノ言フ所  
ヲ以テスレハ二十七億フランク又信ヲ置クニ足ルヘキ説ニ據  
レハ三十億フランクマテニ及ヘリト云フ  
右ノ銀行証券ノ減滅スヘキモノヲ燒却スルハ巴理府廳ニ於  
テ其知事ノ眼前ニテ之レヲ舉行セリ當時「トリ」ト又氏其知事  
タリ一日今燒却スヘキ証券ヲ束テシモノニ就テ同氏ニ之レカ  
検査ヲ許ルサリレヲアリ是ヲ以テ同氏ハ其實數ヲ知ルヲ能  
ハス故ニ其上申書中ニ純總ニ言フテ曰ク「燒却セシ証券ノ金額  
ハ總計〇〇〇〇フランクニ至レリト人予ニ言フト同氏ハ翌日

直チニ其職ヲ免セラレタリ是ニ於テカ同氏ハ攝政タルオルレ  
アシ候ノ家ニ至リテ自己ノ免職トナリタル理由ヲ尋問セシニ  
オルレアシ候答ヘテ曰ク汝敢テ予カ答ヲ望ムナレハ則チ答ヘシ  
抑ク汝ノ職ヲ免セシ所以ハ汝ハ甚タ廉直ニ過キ且ツ今回ノ權  
謀ニ就テ毫モ理會スル所ナキヲ以テナリ彼ノ減滅スヘキ証券  
ノ中ニテ竊カニ再ヒ使用セシコトハ此權謀ノ破レシ後ニ非サ  
レハ人ノ之レヲ了知スルモノナカルヘキナリト  
此事ハ「バ」リ「氏」及ヒ「モ」ン「レ」氏ノ其著述中ニ述フル所ナリ  
又夫ノオルレアシ候ノ攝政ノ時ニ関セル他ノ諸書中ニモ亦シ  
能ク此事ヲ論スル所アルヲ以テ乃チ是レ確實ノ事タルヤ明カ  
ナリ  
却説夫ノ株券ニ就キ人皆爭フテ之レヲ買収セントシ隨テ其價  
倍ク騰貴スルノ時去リテ又競フテ之レヲ賣却セントシ隨テ其

株  
券

價漸ク低下スルノ時来レリ蓋シ始メ其重立タル株主ハ右ニ述  
フルカ如キ種々ノ舉動ニ就テ大ニ危疑ヲ抱キ其株券ヲ賣却ス  
テ貨幣ニ換ヘント欲セシニ由ルナリ然リ而シテ多ク之レヲ可  
有セル人ト皆彼レニ倣フテ亦夕之レヲ賣却センコトヲ務ムルヲ  
以テ其價漸ク下落セリ(千七百二十年ノ始ノニ起レリ)是ニ於テ  
カテローブ氏ハ之レヲ防止センカ為メニ種々ノ處置ヲ行ヒシト  
雖モ其處置ハ甚ク限リアルヲ以テ之レカ結果ハ及テ倍々此下  
落ヲ盛シナラシメタリ而メ遂ニ千七百二十年十月十日ヲ以テ  
該銀行ヲ閉鎖シタリ次イテテローブ氏ハ一時其勢甚ク盛シニシ  
テ大ニ人ニ尊重セラレシモ今ヤ外國ニ遁逃セサルヲ得サルニ  
至リタリ是カ為メニ實ニ望ヲ失ヒ産ヲ破リシ者勝テ數フヘカ  
ラサルナリ  
抑クテローブ氏ハ民ノ信ヲ得ヘキモノハ國主ナリト思考セシヲ

以テ貨幣ヲシテ悉ク其紙幣ニ代ラシムルコトヲ得ヘキモノナリ  
ト信認シタリ現今ト雖モ尚ホ公法論者及ヒ官吏ノ中ヒテ此說  
ヲ主張スルモノ尠シトセス  
テローブ氏ハ大蔵卿タリシ時ニ種々ノ重稅ヲ廢止シタリ又官職  
ノ賣買ヲ禁止センコトヲ欲レ(是レ則チ公議院ノ同氏ヲ忌惡スル  
所以ナリ)及ヒ苛酷ナラスシテ簡明ナル租稅徵收法ヲ設立セン  
コトヲ希望シタリ  
夫ノ銀行ハ千七百二十年十月十日ヲ以テ之ヲ閉シタルコト予  
輩ハ既ニ之ヲ明言シタリ其証券ハ既ニ同年七月ヨリ交換ヲ停  
止シ而シテ其閉鎖ノ時機ニ於テハ既ニ其價百リブールノモノ  
二十五リブールノ價ニ及ヒタリ又夫ノ印發會社ノ証券ハ千七  
百二十三年九月ニアリテハ百分ノ二十ノ比例ニテ之レヲ賣買  
シタリ

大蔵省

第三節 英國銀行証券ヲ強ヒテ融通セシメタル事

大不列顛ノ貴族政府カ大變革ヲ行ヒタル佛國ニ向テ兵端ヲ開  
キシ時ニ方リ英國銀行ハ其特許ノ期限ヲ引延セシメテ請求シ  
而シテ其株主ノ資金ヲ政府ニ貸與シテ以テ之レカ許可ヲ得タ  
リ其後政府ハ該銀行ニ其當テ發行セル証券ノ外ニ更ニ之レヲ  
製造シテ政府ニ貸與センコトヲ要求セシメテ乃チ該銀行ノ政  
府ニ貸與セシ金額ハ千七百九十七年ニ於テハ六億フランノ餘  
ニ至レリ然レバ該銀行ハ是レカ為メニ大ニ利益ヲ占得シタリ  
此時ニ方リ銀行証券ト貨幣トノ間ニ差ヲ生セシメテ以テ此証券  
ノ交換ヲ求ムルモノ漸ク増加セリ是ニ因テ政府當時會議院ニ  
據リテ維持セリハ該銀行ニ貨幣ヲ以テ其証券ヲ所有スルコトヲ  
停止スルノ權ヲ附與シ又同時ニ此証券ヲ所有スル者ニ之レヲ  
以テ各自ノ負債ヲ辨償スルコトヲ許可シタリ是ニ於テカ即チ此

証券ハ真ニ紙幣ニ同シキモノトナリタリ

宰相ピット氏及ヒ其後ノ宰相モ尚ホ此証券ヲ増殖スルコトヲ許  
シタリ故ニ千八百十四年ニ至リテハ既ニ其價百磅ノモノハ七  
十五磅ニ低下シ而シテ金銀貨ノ價漸ク騰貴セリ是レカ為メニ  
公費ノ増加セシメテ斯レトセス隨テ英國人民ハ重稅ヲ出クサバ  
ルヲ得サルニ至リ政府ノ債主ハ夫ノ低價ノ証券ニテ支給セラ  
ルコトヲ以テ大ニ困窮ヲ極メタリ  
蓋シ此害ヲ防カシメハ既ニ下落セシ証券ノ價ト同シキ價ノ金  
銀貨ヲ製造シテ之レヲ發行スレハ則チ其目的ヲ達スルニ至リ  
シナルベシ何トナレハ此下落ヨリ生スル所ノ損失ハ既ニ人皆  
被リ了リタルヲ以テトリ若シ夫レ實ニ斯レ如ク為セシナレハ  
政府ハ其巨債ノ一部分ヲ自ラ減減セシムルニ至リ加之其債主  
ニ初メ借受タル証券ヨリモ貴キ價ノ貨幣ヲ以テ之レヲ還償ス

大  
義  
省

ルカ如キ不公平ナク又初メ借受タル貨幣ヨリモ低キ價ノ証券  
 ヲ以テ之レヲ返却スルカ如キ不正ナキニ至リシナルヘシ然リ  
 ト雖モ英國政府ハ全ク異リタル所置ヲ行ヘリ即チ千八百十年  
 大蔵ノ事情ヲ調査セシ後ナ西議院ニテ傲然証券ハ曾テ下落セ  
 シトナレトノ奇怪ナル布告ヲナシ而シテ今後証券ノ數ヲ減少  
 シテ以テ其價ヲ舊ニ復シント議定セリ  
 此處置ヲ施行セシハ偶々戦争止ミテ平和ニ歸シ且商工ノ諸業  
 大ニ繁榮セシ時ニアリシヲ以テ千八百十七年即チ其目的ノ  
 如ク証券ノ價ヲシテ貨幣ノ價ニ均シカラシムルヲ得タリ却  
 說此騰貴ハ亦タ夫ノ下落ノ時ニ於ケル幣害ト均シキ弊害ヲ醸  
 成シタリ唯是レカ為メニ利ヲ得タル者ハ官吏僧徒政府ヨリ養  
 老銀ヲ受クル人公債証券ノ所有者及ヒ總テ特許ヲ得タル人ニ  
 過キサルヲ三

抑々此証券ハ其下落ノ徐々タリシト甚タシカラサリシト  
 ニ因リテ前節ニ開陳セシ佛國銀行証券ニ以スレハ大ニ優ル所  
 アルモノ、如シ蓋シ此ハ英國銀行ノ之レヲ發行スルニ當リ大  
 ニ思慮ヲ加ヘシ事ト英國人民ノ其政府ヲ信スルノ深カリシ事  
 トニ由ルナリ

英國銀行証券ノ下落セシ景況ハ即チ左ノ如シ

千八百年	八分乃至九分
千八百一年	二分乃至三分
千八百十年	一割三分乃至一割四分
千八百十一年	七分乃至八分
千八百十二年	二割乃至二割五分
千八百十四年	二割五分餘
千八百十五六年	一割六分乃至一割七分

大蔵省

千八百十七八年  
千八百二十一年

四分乃至二分  
貨幣ト同價ニ至リタリ

第三節

ノ事(千八百九十年ヨリ千七百九十四年ニ至ル)

佛國ニ於テモ亦夕英國ト同時ニ巨額ノ紙幣ヲ發行セリ但シ其  
下落ノ若シキヲ實ニ英國ノ比ニ非サルナリ  
柳クアシギヤト云フ紙幣ヲ發行セント謀リシハ千八百八十七  
年ニアリ然レモ實際之レヲ發行セシハ千七百八十九年ニ始マ  
レリ其第一發行ノ金額ハ四億フランクニ過キカリシモ其後又  
直チニ三百萬フランク四百萬フランク及ビ八億フランクヲ僅  
カニ一年間ニ順次ニ發行レタリ其種類ハ百フランク百二十五  
フランク二百フランク二百五十フランク三百フランク四百フ  
ランク七百五十フランク千フランク二千フランク及ビ一萬フ

ランクノ十種アリ又其小數ノモノニ至リテハ九十フランクハ  
十フランク七十フランク五十フランク四十フランク及ビ五十  
スノ一ニ十分ク四十スノ三十スノ二十五スノ十五スノ十スノ  
五スノノ十七種アリ而シテ千七百九十年ノ末ニ至リテハ其民  
間ニ流布セルモノ既ニ十二億フランクニ及ヒタリ其後千七百  
九十二年八月ニ至リテハ二十二億フランク又千七百九十四年  
五月ニ至リテハ六十億フランク又千七百九十五年ノ末ニ至ル  
間ニ其製造セル総額ハ四百億フランク餘ニ至リシト云フ但シ  
當時其他尚ハハンデル及ビブレタトギノ政黨カ發行セシ紙幣  
許多アリ之レヲ合算セハ當時ニ流布セル紙幣ノ數實ニ幾許ソ  
ヤ  
其第一發行ノ時ヨリ既ニ政府ハ強テ其通用ヲ命シタリ然レモ  
此第一行ノモノニ就テハ利子ヲ下付スルヲ公告セリ但シ其

紙幣

第二發行ノモノヨリ皆ナ利子ヲ下付セサルモノト定メタリ此  
紙幣ノ下落ハ既ニ其初度ノ發行ト同時ニ始マレリ即チ千七百  
九十一年ノ初メニ於テハ其下落一割ニ至リ又九十二年ノ末ニ  
於テハ三割七分九十三年ノ末ニ於テハ五割五分九十四年ノ末  
ニ於テハ七割八分ニ及ヒタリ是ニ於テカ官吏ハ其活計ニ苦ミ  
公債証書ノ所有者ハ餓死スルニ至リ唯生活ニ困シマ<sup>ル</sup>モノ  
ハ殆ント外國ニ<sup>在</sup>セル兵士ノミナリ實ニ當時此紙幣ヲ以テ  
ハ殆ント一物ヲモ購求スル能ハサルカ如クナルヲ以テ<sup>經</sup>紀上  
ニ於テハ多分<sup>之</sup>レヲ使用セサルニ至レリ予輩ノ父カ長靴一足  
ヲ購求スルカ為メニ八千フランク乃至一萬フランクヲ費ヤシ  
庖人カ牛酪一升ヲ得ル為メニ六百フランク乃至七百フランク  
ヲ費ヤシ<sup>此</sup>兒童カ糖<sup>一</sup>本ノ為メニ二十フランク乃至三十フラン  
クヲ費ヤセ<sup>レ</sup>ハ即チ此時ニアリト云フ

抑々此紙幣ヲ發行スルヤ其初メニ於テハ臨時出納局ニ之レヲ  
持参スレハ即チ貨幣ト交換スヘシト公告セリ然リト雖モ實際  
ニ至リテハ決シテ之レヲ交換セ<sup>レ</sup>トナカリキ唯實際之レヲ交  
換セ<sup>レ</sup>ハ貨幣ヲ以テセシニアラス糶賣法ニテ賣却シタル官有  
地ヲ以テセシノミ然レ<sup>モ</sup>此實有地ノ價ハ此紙幣ノ下落スルニ  
應シテ倍々増加スルヲ以テ政府ハ大ニ満足スル所アルモ人民  
ハ及テ益々困却セリ然リ而シテ後ニ發行セ<sup>レ</sup>紙幣ハ其交換ヲ  
要求スル<sup>ト</sup>能ハサルモノト為シタリ然レ<sup>モ</sup>彼ノ交換ヲ要求ス  
ルヲ得ヘキ初メニ發行セ<sup>レ</sup>紙幣<sup>ハ</sup>此後ニ發行セ<sup>レ</sup>紙幣ト雖モ  
トナレ<sup>ル</sup>右ニ速フル如ク交換ヲ要求スルヲ得ヘキ紙幣ト雖モ  
實際政府ハ之レヲ交換セ<sup>レ</sup>トナキカ故ナリ  
前項ニ陳述セ<sup>レ</sup>ア<sup>リ</sup>ト名タル紙幣ノ後チニ又「マンダ」ラ  
リトリオトト名タル紙幣ヲ發行シタリ此紙幣ヲ以テハ糶賣法

紙幣

ナツレテ官有地ヲ買收スルヲ得ヘシト定メタリ然レモ此紙幣ハ亦タ夫ノアレギアノ如ク直ニ人漸ク之ヲ信セサルニ至リタリ是レ蓋レ當然ノ事ナリ此紙幣ノ製造ハ改革曆第四年六月二十八日(千七百九十六年三月十八日)ノ法令ヲ以テ之レヲ確定シ而レテ其製造額ハ二十四億フランクト為セリ抑々此紙幣ハ之レヲ以テ三十「ス」以上ノ彼ノアレギアヲ交換センク為メ製造シタルモノニシテ乃チ總テ佛國內ニ貨幣ト均シキ價ヲ以テ通用スヘキモノト定メタリ然リ而シテ三十「ス」以下ノアレギアハ銅貨ヲ以テ之レヲ交換シタリ然レモ此銅貨ハ亦タ殆ント紙幣ニ均シキモノニシテ其實價ハ名價ノ十分一ニ過キサリナリ

此「マ」ンダリテリトリオ「ト」云フ紙幣ハ紙幣下落ノ最モ若シキモノノ例ナリ此紙幣(其金額二十四億フランク)ハ三十七億ハ

千五百萬フランクノ價アル政府財產ヲ以テ之レガ抵當ト為シタルモノト雖モ然レモ其下落セシ「ト」最モ甚クシキニ至レリ即チ千七百九十六年七月ニ於テ既ニ經紀上ニ於テ人之レヲ忌嫌スルニ至リ而シテ翌年二月四日(此時ニ於テハ既ニ其融通止ミタリ然レモ大蔵ニ於テハ尚其時價ニ隨テ之レヲ領收セリ)ニ至リテハ某ノ地方ニ於テ百フランクノ紙幣僅オニ二「リ」アルハ「ア」ハ「ハ」一「ブ」ラ「ン」クノ價トナリタリ

第四節 佛國銀行ノ証券及ヒ澳地利魯西亞土耳其伯西爾ノ紙幣

佛英二國ノ外ニモ亦タ諸國ニ於テ曾テ屢ク紙幣ヲ發行セシ「ト」ハ其史乘ニ於テ瞭然タリ方今紙幣ノ若シク流布セル所ハ即チ澳地利魯西亞土耳其伯西爾是レナリ

佛國政府ハ千八百四十八年二月ノ改革後千七百九十七年英國

大藏省



ニテビツト氏ハ行ヒシ處置ニ倣ヒテ佛國銀行ニ其証券ノ交換ヲ停止スルノ權ヲ附與レタリ而レテ該銀行ノ斯ノ如ク其交換ヲ停止セシメテ殆ント二年ノ久シキニ及ヒタリ(千八百四十八年ヨリ五十年)然リト雖モ其証券發行ハ適宜ニ之レカ限畧ヲ立テ以テ安リニ其度ヲ超ユルヲナカラシメタルカ故ニ其下落ハ僅カニ百分ノ二乃至三ニ過キサリシナリ但シ當時澳地利羅馬加利ノ銀行証券ハ之レト異ナリ其下落セシメテ甚ク盛シナリ

キ  
 澳地利ニ於テハ千七百年代ノ末以來紙幣ハ恰モ其瘍瘡ノ如クニシテ種々ノ形態ニテ屢ク此ニ現出シタリ而シテ其下落ハ毎ニ甚ク盛シナリシナリ即チ千八百十一年銀行証券ヲ發行セシニ其金額殆ト一百万フロリシ(二十六億フランク)ニ及ヒタリ後々其下落セシメテフロリシノ証券ハ其價銀貨ノ一フロリシ

ノ八分一ニ過キサルカ如ク甚クシキニ至レリ此ニ於テカ澳國政府ハ其五分一ノ價ニテ悉ク之レヲ交換スルヲ命令シ以テ之レヲ全滅セシメテ決定シタリ  
 澳國紙幣ノ下落ハ其發行額ノ増加スルニ隨テ亦ク愈ク進行シタリ其景況ハ即チ左ノ如シ但シ左ニ掲クル所ノ紙幣發行額ハフロリシヲ以テ算ス又其總計ハ一年ノ總計ニアラヌ總テ發行セシ紙幣ノ總額ナリ

年	銀貨價值ノ比例	紙幣發行額ノ總計
千七百九十六年	一〇〇ト四分一	四六、八〇〇、〇〇〇
千七百九十七年	一〇二	七四、二〇〇、〇〇〇
千七百九十八年	一〇一	九十九、〇〇〇、〇〇〇
千七百九十九年	一〇七	一四一、〇〇〇、〇〇〇
千八百年	一一五	二〇六、九〇〇、〇〇〇

千八百十一年	一一六	二六二、〇〇〇、〇〇〇
千八百十二年	一二〇	三三七、二〇〇、〇〇〇
千八百十三年	一三三	三三九、二〇〇、〇〇〇
千八百十四年	一三五	三三七、六〇〇、〇〇〇
千八百十五年	一四六	三七七、一〇〇、〇〇〇
千八百十六年	一七五	四四九、八〇〇、〇〇〇
千八百十七年	二〇二	四八七、六〇〇、〇〇〇
千八百十八年	二二二	五二四、二〇〇、〇〇〇
千八百十九年	三一五	六五〇、九〇〇、〇〇〇
千八百二十年	三五二	九九五、〇〇〇、〇〇〇
千八百二十一年	八三三	一、〇六一、九〇〇、〇〇〇

又千八百十六年ニ於テ証券ヲ發行シテ以テ維也納銀行ヲ設立シタリ但シ此証券ヲ交換スルニハ其十分一ハ貨幣ヲ以テシテ

分ノ九ハ紙幣ヲ以テスヘト定メタリ其後千八百四十八年ニ至リテ該銀行ハ其証券ノ交換ヲ停止スルノ權ヲ得タリ當時該銀行景況ノ良否ト其証券發行額ノ多寡トハ其証券五割下落セシヲ以テ之レヲ明知スルヲ得ヘシ千八百五十九年一月一日ヨリマタ其交換ヲ始メシト雖モ其後四ヶ月ヲ經テ亦タ再々之レヲ停止セリ

魯西亜ニ於テモ亦タ澳地利ニ於ケル如ク既ニ殆ント一百年前ヨリ紙幣ヲ發行セリ而シテ其下落ハ八割餘ノ甚タシキニ至レリ此ニ於テカ魯國政府ハ千八百三十九年銀貨ループルハ紙幣ノ三ループル半ニ當ルモノト定メ以テ其下落ヲ七割ニ留メンヲ欲シタリ是レ蓋シ物ノ價ハ固ヨリ立法官之レヲ定ムルヲ得ヘキモノト信セシニ由ルモノ、如シ此時ニ方リ此目的ヲ達センカ為メ魯國銀行ニ銀貨ループルノ寄託所ヲ開設シ而シ

テ之レニ任スルニ持参スレハ即チ交換スヘシト云フ該所ノ証  
券ヲ銀貨ニテ交換スルヲ以テシ又紙幣ノ定價紙幣三ループル  
半ハ銀貨一ルト云ブルニ當ルニテ之レヲ銀貨ニ交換シテ此定價ヲ維持スル  
ヲ以テセリ然レモ其後直チニ紙幣ノ交換ヲ停止セシテ以テ其  
下落ハ最も甚シキニ至リタリ千八百五十七年及ヒ五十八年ニ  
於テ紙幣ループルノ流通額ハ銀貨ループルノ價ヲ以テ算スレ  
ハ七億三千五百萬ループル又紙幣面ニ記載セル總金額ヲ以テ  
スレハ殆ント百二十億フランク又當時ノ時價ヲ以テ算スレハ  
三十億若シクハ四十億フランクニ至ルヘシ但シ此紙幣ハ種々  
ノ銀行ノ手ヲ經テ之レヲ發行セシモノナリ其後チ千八百五十  
九年五月三十日即チ六月十二日ニ當ルノ法令ヲ以テ此數箇ノ  
銀行ヲ廢止シ之レニ代フルニバンクトレタト云フ一銀行ヲ  
以テセリ

又土耳其ニ於テハカイノル及ヒセムト名クル紙幣ノ金額一  
億三千萬乃至一億四千萬フランクアリト云フ其一ハ往昔ノ發  
行ニ係リテ利子ノ附着セルモノナリ其一ハ近時ノ發行ニ係リ  
テ利子ナキモノナリ

伯西爾ニ於テハ紙幣ノ總額殆ント一億三千萬フランクアリ該  
國紙幣ハ千八百五十七年ニ至ルマテハ人民大ニ之レヲ尊重セ  
シカ此時ヨリ漸ク經紀上ニ正金ヲ要求スルニ至リテ紙幣ハ自  
ラ下落セリ此ニ於テカ政府ハ私立銀行ニ令シテ其証券發行額  
ヲ減少セシメタリ蓋シ人民ノ銀行証券ヲ撰用シテ紙幣ヲ遠ク  
ル時ニ際シ政府ノ真ニ施行スヘキ處置ハ其証券ノ數ヲ減少セ  
シムルヨリモ寧ロ此紙幣ノ數ヲ減少スルニアルヘシ

第十五章

租稅及ヒ公債此章ニ掲クル所ハ英國ノ議院ニテ東

洋戦争ノ軍資ヲ得ル事ニ就テ租税ト公債トノ此二者ノ優否ヲ討論セシ時ニ方リグランドストーヌ氏ノ演説セルヲ採録セシモノナリ前篇第十六篇ヲ参考スヘシ

夫レ公債ヲ以テ事ヲ為ス時ハ當時ノ人民ハ實ニ之レカ利害ヲ顧ミサルモノナリ而シテ其影響ハ後世ノ人民際限ナク之ヲ受クルニ至ルヘシ抑々人民タルモノ其造為セル負債ヲ後世ノ人民ニ贈遺スルコトナク親ラ之レヲ擔負シ且此レヨリ生スル所ノ利害ヲ計考セサルヘカラサルモノニアラスヤ此政畧ハ公債ヲ以テ為スコトハ道德上ヨリ見ルモ經濟上ヨリ見ルモ尙シク是レ至當ノモノト為スヘカラサルモノナリ蓋シ軍費ハ道德上ノ響ニシテ上帝之レヲ人民ノ情欲ニ懸クラレシモノナリ

戦争ハ人民ノ強盛ナルコトヲ現ハシ且其怨恨ヲ消散スヘキヲ以

修徳ノ旨

テ之レカ為メ人民ハ大ニ之レヲ愉快ト為シ且之レカ為メニ其害、稍く蔽隠セラルモノナリ然リト雖モ若シ夫レ開戦セバハ則チ毎年之レカ費用ヲ出タサ、ルヲ得スト云フコトアルカ故ニ乃チ之レヲ罷ムルニ至ルヘシ是則チ軍費ハ開戦ノ響ナリト云フ所以ナリ實ニ此軍費アルカ為メニ人民ハ未タ開戦セバハ先チテ之レカ為メニ費ス所ト得ル所トヲ計考シ未タ開戦セバ得ヌ開戦スレバ則チ可及的速カニ平和ニ歸センコトニ決意セサルモノナカルヘキナリ

戦争ハ更ニ國費ヲ増加スルモノナリト云フコトハ我輩ノ決シテ忘却スヘカラサル事ナリ又今某國ノ為メニ魯西亞帝國ト開戦スレハ則チ英國人民ハ非常ノ勞力ヲ為サ、ルヘカラス且英國人民ニ平時ニ於テ要求セシ所ノ租税ヨリモ一層重キ租税ヲ要求セサルヲ得ルニ至ルコトナシト想像スルモノハ我カ黨中一

戦

人モ之レナシト云フコト能ク方寸一記セサルヘクニ若シ夫  
レ英國人民ハ此重税ヲ負擔スルモ可ナリトノ意ニアラサレハ  
則チ開戦スヘオラサルヲ要ス又既ニ開戦スルハ速カニ平和  
ニ歸スルコトニ致タトシテ焦心セサルヘカラス

英國議院ハ此説ヲ可トシテ公債ヲ募集セサリシナリ然レ其  
翌年此グラドストー又氏ヲ嗣キシ大蔵卿ノ説ニ從フテ一十六  
百萬磅(四億フランクニ當ル)ノ公債ヲ募ルコトヲ許諾シタリ  
佛國ニ於テモ亦タ此東洋戦争ノ為ニ順次ニ二億五千萬  
シク五億フランク及ヒ七億五千萬フランクノ公債ヲ募リタリ  
但シ此外ニ尚ホ浮漂債殆ント十億フランクヲ造為セリ

第十六章

政府ニ於テ國債ヲ還償スルコトノ権理アルコト(此章ニ均  
クル)ハカンボシ氏ノ年報書中ヨリ採萃セシモノナ

リ新篇第十八篇第四章ヲ参考スヘシ但シ此カンボ  
シ氏ノ言フ所ハ曩キニ予輩カ前篇ニ論セシヨリニ  
甚タ明瞭ナリ

凡ソ公債証書ニ母金額ヲ記載セスレテ唯利子額ノミヲ記載セ  
ルハ於テハ政府ハ常ニ其價ヲ意ノ如ク為スヲ得ヘシ蓋  
政府ハ常ニ之レヲ還償スヘキ権理ヲ有スルヲ以テ之レハ  
利金五十フランクノ証書(其母金ハ一千フランクナリ)ハ其價  
八百フランクニ過キサルハ政府ハ該証書ノ所有ニ九百  
フランクニ之レヲ還償センコトヲ先ツ附録シ而レテ後チ之レヲ  
還償スルコトヲ得ヘシ此時ヨリ該証書ノ價ハ騰貴シテ其金額ト  
同價ニ至ルヘシ然ラハ則チ政府ハ之ヲ還償シテ母金十分一ノ  
利益ヲ占得ス蓋シ此ハ決シテ不正ノ事ニアラサルナリ何トナ  
レハ政府ハ強ク之レヲ還償スルニコトヲス該証書ノ所有主ハ尚

大蔵省

此利金ヲ保有スルモ又母金ヲ領收シモ其意ニ任セハキヲ以テナリ然レモ其金額ヲ記載スルニ於テ此處置ヲ施行スルハ恰モ一部分ノバンクタルニ公債ノ還償ヲ為スニ異ナラサルモノナレハ斯ノ如キ際ニ於テハ蓋シ此所置ハ施行スヘカラサルルモノナルヘシ(右ハ「カンボン」氏ノ編ル國債年報書ノ第五ノ第一項ニ登録セル所ナリ)

第十七章

會計簿

會計簿トハ政府ノ諸費用ト諸收入トヲ登録シタル簿冊ヲ云フ一會計簿ノ成立期限ハ太抵一年ノモノト雖モ時宜ニヨリ二年或ハ三年ニ涉ルニアリ此期限ヲ名ケテ會計年度ト云フ但シ會計年度ハ概テ一月一日ヲ以テ始マリモノナリ會計簿ニ歲出歳入ノ預算ヲ示スモノアリ又其清算ヲ示スモノアリ其預算ヲ示ス

モノハ即チ會計預算簿ト云ヒ又其清算ヲ示スモノハ即チ會計清算簿ト云フ

此會計簿ハ諸官署ヨリ大藏卿ニ送致スルハ會計簿ノ要略ナリ共議政体ノ國ニ於テハ之レヲ議院ニ付シテ國憲ノ許ス所ニ從ツテ討論議定セシムルモノナリ

會計簿ニ據リテ確定スル所ノ定額ノ外ニ尚ホ増補定額及ニ臨時定額ヲ要スルコトアリ其増補定額ハ會計簿中ニ登録シタレバ公費ニ擬セシ金額ノ不足ニ因リテ之レヲ要シ又臨時定額ハ會計簿ニ登録セサル臨時發生セシ公費ニ依リテ之レヲ要スルモノナリ(後テ第三十四章ヲ見シヘ)

會計年度ハ法則ニヨリテ定メタル時期ニ於テ之レヲ閉鎖シ而シテ是ヨリ後ヲ於テハ此閉鎖シタル會計年度ニ属スル費用ハ更ニ開キタレバ會計年度ニ属スル定額ノ内ヲ以テ之レヲ支給

スルモノトセ

佛國ニ於テハ會計簿ノ以テ本稅陪稅ヲ問ハス又陪稅ノ大政府ノ費用ニ供スルト郡邑ノ費用ニ供スルトヲ論セズ總テ直稅(地稅分頭及ヒ動產稅門戶及ヒ寔庸稅營業稅)ノ稅率ヲ確定シ又各郡ニ於テ地稅分頭及ヒ動產稅門戶及ヒ寔庸稅ノ三稅ノ配當額ヲ確定セリ佛國ニ於テハ此三稅ハ配當稅ノ方法ヲスルニ定メ而レテ後之レ法ヲ各郡各然リ而シテ此各郡ノ配當額ハ各別會ニ於テ復タ之レヲ各郡ニ配當シ各郡會ニ於テ復タ之レヲ各郡ニ配當ス而レテ各郡ニ於テハ配當委員ヲレテ之レヲ各納稅者ニ配當セシム

又此會計簿中ニハ該會計年間ニ徵收スヘキ諸稅ノ數目ヲ登記シ又優リ新稅ヲ記入シ而シテ翌年ノ會計簿中ニモ尚ホ之レヲ續ヒテ記入スルアリ

此會計簿ノ外尚ホ三年乃至四年ノ出入ノ清算ヲ示ス會計簿ナリ

公費ヲ討論シ之レヲ許諾シ之レヲ檢査スルキ方法ニ就テハ予輩ノ今茲ニ開陳スヘキ事ニアラサルナリ是レ英ノ政治學ニ關スル所ナルヲ以テナリ故ニ予輩ハ既ニ第二十一篇ニ於テ是レノ宜シキヲ得ル為メニ要スル所ノ事情ヲ論スルニ及ビ此ノ事ニ就テ少ク論述セシ所アレハ乃チ之レニ以テ足レリトス

夫レ會計簿ハ其編成法ニ至リテハ諸國概テ皆同ナリト雖モ其歲入歲出ニ就テ之レヲ見ル所ハ其性質ト共多寡トニヨリテ自ラ異ナル所アリ

予輩ハ今左ニ佛國英國及ヒ合衆國ノ會計簿ヲ示サントス但シ其歲入歲出ノ概略ヲ記スノミナラズ其詳細ナルハ續篇第一章ニ掲示セン年報書等ニ就テ見ルハ

第十八章

佛國會計簿

予輩カ今左ニ掲示スル所ノ千八百六十一年ノ會計豫算ナリ其  
後衆議院ニ於テ之レヲ變更ヲ為シタリ然リト雖モ決シテ著シ  
キ變又ハ是レナカリレナリ

千八百六十一年ノ會計豫算

歳入

直税

四七九〇〇〇〇

(右ハ、ブランクノ計算ナリ以下亦タ皆同シ)

簿記税、印税及ヒ官有地税 三五九六〇〇〇

山林税及ヒ魚獵税 三七八〇〇〇〇

関税及ヒ鹽税(國境ナル 一六五、一〇〇、〇〇〇

諸品ニ於テ)

八二十一

間税 四九八、六〇〇、〇〇〇

郵便税 六一、九〇〇、〇〇〇

格外收入 一九五、〇〇〇、〇〇〇

諸收入 四二、一〇〇、〇〇〇

通常收入合計 一、八三九、四〇〇、〇〇〇

臨時收入 一、三〇〇、〇〇〇

歳入總計 二、一四〇、七〇〇、〇〇〇

歳出

國債用 五七〇、九〇〇、〇〇〇

給與 四二、九〇〇、〇〇〇

諸官署用(其合計八八二、〇〇〇、〇〇〇)左ノ如シ

國務省 一〇、四〇〇、〇〇〇

司法省 二八、六〇〇、〇〇〇



外務省	一〇、七〇〇、〇〇〇
内務省	一六三、四〇〇、〇〇〇
大蔵省	一九六、〇〇〇、〇〇〇
陸軍省	三四五、二〇〇、〇〇〇
海軍省	二二四、二〇〇、〇〇〇
文部省	二〇、六〇〇、〇〇〇
教部省	四七、二〇〇、〇〇〇
農商省	一七、三〇〇、〇〇〇
工部省	五四、五〇〇、〇〇〇
阿爾日耳其他ノ属地事務局	四〇、〇〇〇、〇〇〇
收稅費	二〇〇、三〇〇、〇〇〇
返還	一、三五五、〇〇〇、〇〇〇
通常費合計	一、八〇八、二〇〇、〇〇〇

八三二

臨時費	三一、九〇〇、〇〇〇
歳出總計	一、八四〇、一〇〇、〇〇〇
會計豫算ニ加ヘタル別種ノ費用	一、三、七〇〇、〇〇〇
有切人管理局	三、八〇〇、〇〇〇
官板局	一、〇〇〇、〇〇〇
領事書記局	一、二〇〇、〇〇〇
貨幣及ニ賞牌製造局	四六、三〇〇、〇〇〇
陸兵給與局	一二、六〇〇、〇〇〇
海兵扶助局	三、五〇〇、〇〇〇
上等學ニ属スル諸學校	八二、一〇〇、〇〇〇
合計	一一五、五〇〇、〇〇〇
諸州ノ費用	一一五、五〇〇、〇〇〇
内務省ニ属スルモノ	一一五、五〇〇、〇〇〇

文部省 = 属マレルモノ

六、一〇〇、〇〇〇

合計

一、二一、六〇〇、〇〇〇

歳出歳入ノ分解

國債ノ為ニ要スル諸費ヲ分解スレハ則チ左ノ如シ

一切金依舊國債ノ利子(但シ 三五三、九〇〇、〇〇〇)

四分半、四分三分ノ利子アリ

國債償却 九八、九〇〇、〇〇〇

堀河等ノ工業ヲ起ス為メニ 九、四〇〇、〇〇〇

募集セシ別種國債ノ利子 三六、九〇〇、〇〇〇

種々ノ名義アル還償スヘキ 三、六〇〇、〇〇〇

國債ノ利子 七、一〇〇、〇〇〇

終生債ノ下付金 七、一〇〇、〇〇〇

立法權ニ要スル諸費ヲ分解スレハ則チ左ノ如シ

八、二、千、三

内廷ノ用度 二、五〇〇、〇〇〇

皇族ノ給與金 二、二〇〇、〇〇〇

元老院ノ諸費 六、一〇〇、〇〇〇

立法議院ノ諸費 二、七〇〇、〇〇〇

有切人ノ保助金 六、七〇〇、〇〇〇

夫ノ國務省ノ費用中ニハ參議院記録庫、美術館、劇場、公館等ノ費用アリ又内務省ノ費用中ニハ諸弱ノ費用アリ又教部省ノ費用中加特力教ニ要スルモノハ四百三十三萬フランクニシテ他教ニ要スルモノハ百七十萬フランク弱ナリ

夫ノ收稅費ニ億フランクヲ分解スレハ則チ直稅ノ收入費千五百萬フランク薄記稅印稅官有地稅ノ收入費千四百萬フランク山林稅ノ收入費八百萬フランク間稅ノ收入費六千萬フランク烟草稅ノ收入費五千七百萬フランク郵便稅ノ收入費四千四百

萬フランク是レナリ(收税費ノ事ニ就テ續篇第九章ニ陳述セシ  
モノヲ見ルヘシ)  
返還ノ為ノニ要スル一億一千一百萬フランクノ内ニハ直税ニ  
就テ返還スルモノ或ハ收入スルヲ能ハサルモノ八千萬フラン  
ク輸出品ニ就テ返還スルモノ二千萬フランク間税ニ就テ返却  
スルモノ三百六十萬フランク罰金等ノ返却スルモノ五百萬乃  
至六百萬フランクアリ  
又歳入ノ部ニ至リテハ直税ノ收入額四億七千九百萬フランク  
ノ内ニハ地稅ヨリ生スルモノ二億八千四百萬フランク分頭及  
ビ動産稅ヨリ生スルモノ七千二百萬フランク門戶及ヒ寢牖稅  
ヨリ生スルモノ四千五百萬フランク營業稅ヨリ生スルモノ七  
千七百萬フランクアリ  
簿記稅印稅及ヒ官有地稅ノ收入額三億五千九百六十萬フラン

八千也

ノ内ニハ簿記稅ノ收入額二億八千四百萬フランク印稅ノ收  
入額五千三百萬フランク官有地ノ收入額及ヒ其賣却金額一千  
三百萬フランク官有ノ諸動産賣却金額七百萬フランク官有ノ  
建築物ヨリ生スルモノ百五十萬フランクアリ  
山林稅及ヒ魚獵稅ノ收入額三千七百八十萬フランクノ内ニハ  
山林稅ノ收入額三千三百萬フランク魚獵稅等ノ收入稅ハ三百  
萬フランク邑ニ属スル山林管理費ノ為メニ徵收スル邑稅ハ一  
百二十萬フランクナリ  
関稅及ヒ鹽稅ノ收入額一億六千五百萬フランクノ内ニハ輸入  
稅ノ收入額一億二千六百萬フランクアリ但此内砂糖ノ輸入稅  
ヨリ收入スルモノ四千三百萬フランクニシテ又此内属地製砂  
糖ノ輸入稅ヨリ收入スルモノ二千八百萬フランク外國製砂糖  
ノ輸入稅ヨリ收入スルモノ一千五百萬フランクナリ又鹽稅ヨ

リ收入スルモノ二千八百萬フランク輸出税ヨリ收入スルモノ  
 四百萬フランク航海税ヨリ收入スルモノ四百萬フランクアリ  
 郵便税ノ收入額六千一百九十萬フランクノ内内國信書ノ税ハ  
 五千七百萬フランク外國信書ノ税ハ二百五十萬フランク貨幣  
 運送税(運送税ハ金額百分ノ二十リ)二百五十萬フランク及ヒ貨  
 幣封入信書ノ税ハ五十萬フランクナリ  
 格外收入ノ部内ニハ為務ヨリ偶然ニ生ヌベキ收入二千一百萬  
 フランク屬地亞爾日耳ヨリ收入スヘキモノ二千四百萬フラン  
 ク養老銀ニ充テタル金額ヨリ收入スヘキモノ一千三百萬フラ  
 ンク償却ニ充テタル金額ヨリ收入スヘキモノ一億三千七百萬  
 フランクアリ  
 諸收入ノ部内ニハ公地公屋ノ税三百二十萬フランク鑛山税百  
 五十萬フランク度量衡検査税百四十萬フランク印度ヨリ收入

八千五

スヘキモノ一百萬フランク專賣免許税百四十萬フランク私立  
 電線税五百萬フランク獄舎ヨリ收入スヘキモノ三百七十萬フ  
 ランクアリ  
 今佛國諸公費ヲ其總計百分ノ比例ヲ以テ算スレハ即チ左ノ如

立法及ヒ行政上ノ諸費	千八百五十六年	千八百五十七年
租税等ノ收入費	六分五厘	六分七厘
國債及ヒ養老銀ニ関スル諸費	一割	一割〇四厘
陸軍ニ関スル諸費	三割	二割八分四厘
海軍ニ関スル諸費	一割九分四厘	一割九分七厘
屬地ニ関スル諸費	六分	六分二厘
	一分	一分

司法 = 関スル諸費

二分六厘

二分八厘

宗教、教育、農業、商業、賑恤、健康

五分二厘

五分四厘

ノ保全、植民、導ノ事務 = 関スル諸費

公業、鉄道、電線 = 関スル諸費

七分三厘

七分五厘

生財ノ事業 = 関スル諸費

五分八厘

六分

寄託金ノ返還及ヒ物産ノ輸

六分二厘

五分九厘

出者 = 給與スル費典

右ノ國債 = 関スル諸費中其利子金額ハ魯西亞ト開戦セレカ為  
ハ = 千八百五十六年 = 於テ七千七百七十萬フラント増加シタ

其他佛國ノ會計 = 関スル事ハ後章 = 於テ復タ之ヲ陳述スヘシ

八千五

共計紙數三十三葉

内 八葉

筆者

清水

二十五葉

日

仁科



